

---

# アリアドネの銀弾?【方程式】

ariginnda

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリアドネの銀弾？【方程式】

### 【Nコード】

N8642X

### 【作者名】

ariginnnda

### 【あらすじ】

エリーが一真の高校に現れた！？なんだかやりづらい一真をよそに友里が一真とエリーの関係を疑い始める。そんな学園生活を送っているよそにも、一真の周りには現実側による多数の事件が発生！全ての謎と言う真つ赤な糸を解くため、一真の推理が真実の糸をたらず！

「アリアドネの銀弾」シリーズ第二弾！

「さあ、狩らせてもらおうか、この謎の悪意を・・・」

## STAGE 0

「かわいい!」「どこからきたの?」

俺の横では転向してきた恵梨香とか言う名前で転校してきた、エリーに俺のクラスに群がって対してエリーは質問攻めにあっていた。エリーと言うのは一週間前、俺が関東中で話題になった連続器物破損事件の犯人、【アステスフェンリル】と戦闘していたとき、武器が無く、防戦一方だった俺を助けてくれた少女のことだ。つまり、命の恩人と言うわけ。百五十センチあるかないかというラインの身長の幼女体系、腰辺りまで伸びてる長髪、今は黒色で、瞳の色はこげ茶色だけど・・・まあ、今は言う必要なんか無いよな?

さて、ここで大きな疑問だ。

(あいつ、何しに来たんだ?)

俺は横目でエリーの顔を見た。当然だ。エリーにとってはこの仁舞市にはもう用が無いはず。それもよりよって俺のいる仁舞高校にに転校という形で現れやがった。まったく、何のつもりなんだ。これが単なる偶然なのか、それとも狙ってここにやってきたのか。それは本人に直接聞くしか、知る手立ては無いが、そんな事聞いたって教えてくれるはずも無い。俺は大きいため息を吐いた。

にしてもなあ・・・。あんだけ興味持ってもらってるのに、そんなツンとするなよ。みんなの質問なんか、まるで聞いちゃいない。どこか気が抜けているかのようには、エリーは窓の外に目をやり、そこから視線を全く動かしていない。ま、あんなツンっしてしてるけど、見た目はかわいいから人気なんだろうが・・・。

全く、俺の生活は、どの方向に向かっているんだ?

## STAGE 1

さて、いきなり出オチしそうな予感しかしないのだが、一応エリーに聞いてみよう俺は思った。しかし、ただ単に直球ストレートみたいに聞いても多分はぐらかされる。だから、ここは最初に遠まわしに、そして、不意を突くように、本題を投げかけてみよう。俺が授業中ゲームして時間を過ごしている間に、いつの間にやら今日最後の授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

さ、いきなり聞いて見ようなんて馬鹿な真似なんか俺にはできない。あんな事の話なんか、クラスみんなの居るところでできるわけも無い。しかし、聞いてみると同時に、確かめたいことがある。俺は授業が終わった時間になっても、ゲームをして時間を潰していた。最悪でも、俺のすぐ右前の席に座っている、エリーはそう思っているだろう。俺はゲーム画面に集中しつつも、ダンジョン中に隙を見つけては、エリーのほうへ目を配らせた。エリー本人はずっと本を読んで静かにしていた。

さあ、どこかに行って見る。俺はエリーの背中に必死で念じてみせた。じゃねえと、聞きたい事が増える。そして気づけば一つのダンジョンをクリアしていた。

(結構時間掛けたな)

俺は小さく鼻で息を吐きながら、後頭部を搔いた。さて、ボス攻略に挑むか。

俺はいつもの癖でゲームを机の上において、両手の五本の指全部の間接を鳴らして、首筋を鳴らした。そして、いつもの癖にある作業を付け加えるように目を開いて、エリーの姿を確認した。

(まだ居るな)

おし、これで確定づいた。いや、まだ七十%ぐらいだが……。けど、こいつがここに居る理由が分かった。こいつは・・・俺を、俺を監視しに来たんだ。あのときの戦いだ。俺はあのときの戦いを

回想した。

## ソニックブレイド

俺はあの攻撃で、アステスに止めをさした。いや、刺してしまつたというべきか。今この状況では。あんな止めの刺し方をしたもんだからこんな厄介な監視がついた。どうする、俺。このエリーを振り切るのは、至難の業だぞ。

俺は目を閉じ、考え込んだ。どうやってこいつを振り切る？

しばらく考え込んでから、俺は結論に辿り着いた。

(いや、今は振り切る必要なんか無い)

俺はPMPをスリープモードにしてそれをケースにしまい、PMを入れたそのケースをエナメルバッグの中に入れ、それを肩に掛けて立ち上がった。その様子を見てだろうエリーは俺を一瞥をした。分かりやすいな。それかわざとか・・・わざとなら乗ってやろう。お前の組んだ策略とやらに。

俺は廊下に出た後も背後の気配に気を配りながら帰路をたどった。いまは俺の後ろのエリーは居ない。と言うことは裏道か・・・いや、あいつならあり得るルートはもう一つあるか。上だ。俺がエリーのことを感じていいると言うことをあいつが分かってるなら、そして、あいつが俺の後ろに居ないとしたら、俺が真っ先に思いそうなことは唯一つ。

『エリーは裏道に張っていて、俺を待ち伏せている』

たぶん、あいつのことを知っていなかったとしたら、俺は常識的にそう考ええただろう。しかし、エリーに常識は通用しない。それは、あいつの戦いを間近で見た俺が分かる。

しかし、後ろに居ないって言う事になったら裏道か、上にいるこ

とになる。そして、俺の帰り道で最も帰りやすい裏道は……。

俺はその方向に向かって走り出した。仁舞通り仁のまいどおりのスクールワンの塾と、K I 仁舞支社ビルの間にある隙間道だ！

俺は走った。とりあえずその地点に居よう。いや、多分俺が走ったらあいつはそれに気づいて、俺より一足先にその裏道に入って不意打ちに入るだろう。だったら……。常識の通らない少女には、常識を考えて行動をすればいけない。常識外のことを考えて行動するのが得策なのだ。

「はあはあ……」

俺の予想は当たってくれていた。俺の目の前には腕で壁に押さえつけられて俺の腕を退かそうと力をこめるエリーの姿があった。さあ、本題をぶつけてみるか。

「さあ、言ってもらおうか。どうしてお前は俺に付きまとう？俺はお前にいったい何をしたんだよ！」

「ま、まず、これを離せ……」

エリーは苦悶の表情を浮かべ、彼女を抑えている俺の腕をどこそと力を入れていた。結構強い力だな。俺もこいつの押し出す力に必死で抵抗していた。さすが、戦いのエキスパートだ。

ま、このままじゃ事情を聞くより先にエリーの息の根を止めかねない。俺は力を緩め、後はエリーの力で退かせた。相当強く締め付けられていたのだろう。エリーは自分の首筋を押さえ、呼吸を整えていた。ここまでしなければ俺の言葉なんか聞いてくれないのか……。？良かったぜ。もしあん時みたいに武器とか使つての戦いなら俺はフルボッコだったな。ただの格闘術の戦いだったから、俺が勝てたんだな。

俺はそう解釈して呼吸を整えながらエリーから一步後ろに下がった。しかし、エリーからは目を離さない。逃げる可能性だって十分に考えられる。しかしエリーは呼吸が整うや否や、俺のほうへじつと見据えた。俺を観察するかのように……。

「さあ、呼吸も整っただろう、何で俺に付きまとうのか、話してもらおうか。」

「待て。その前に、お前のPLDを見せる」

PLD？あの携帯端末のことか？しかも命令口調かよ。ま、これは持つても良いけど……。まあ、つべこべ言わず渡すか。

俺は鞆の中を探り探りしてそのPLDとやらを取り出した。俺がPLDを掴むと、エリーの目がそっちに向かった。やっぱり、こいつが狙いか。

「ほら、これだろ？返すぜ」

俺はPLDをエリーに手渡すと、エリーは自分のと見比べ、エリーは左手に持つ自分のを懐にしまい、俺の黒いPLDを差し出してきた。

「ん？いらなのか？」

「いらぬも何も、これはお前の物だ。それに、私はもうそれを手に持つ気は無い」

まるで機械みたいだ。ただ淡々と言うことを言ってる感じだった。まあ、これを俺にくれるってんなら、別に拒みはしないけど……。

俺はエリーからPLDを手渡されると、目を見開いた。

「エリー、お前その手……」

エリーの手が真っ黒にこげていた。いや普通の対応だろ？目の前で手が焦げてるなんて光景を見たら、そりゃあびっくりだ。異常なのはエリーだ。これを我慢していたのか。だからさっき俺のPLDは持つ気は無いって言ったのか。持ちたくないと言うわけだ。エリーはそんな事を表情に浮かべず、自分のこげた手のひらをみてさもつまらなさそうな表情を浮かべ、制服のスカートのポケットにその手を突っ込んだ。

「気にするな。これよりもっと酷い目にあつたことがある。ごく最近で……」

エリーは俺から視線をはずした。おいおい、あれよりもっと酷い目にあつたのか？いっただいどんな場所に居たんだよ。

「何が起こったんだ？」

「つい聞いてしまった。」

「お前に首を絞められて死にかけた」

「……………」

「かける言葉も無い。ごく最近の酷いダメージが俺のせいだとは。」

「……………」

「……………」

「ごめん……………」

「今頃遅い」

せつかく謝ったのに冷たく返された。きつい女だな。俺は困り果てて後頭部を搔いた。

「さて、本題に返ろうか？なんでお前は俺に付きまとうんだ？」

「それは、帰り道で言っただけ」

「……………誰の？」

「お前の」

「……………上がりこむつもりか？」

さて、傍から見れば彼氏と彼女の関係に見えそうな状態だが、それは仕方が無し、と言うわけだ。帰り道でも聞きたいことはきけた。

「俺を監視？」

「そう、私が直々に願い出てね」

「直々って…………俺が何か問題あんのか？」

俺は率直な問題をぶつけてみた。

「大有りよ」

エリーは立ち止まり、俺もエリーに合わせて立ち止まった。エリーは俺のほうへ向き、俺は横目でエリーの顔を眺めた。

「知らないでしょうけど、通常私たちには生まれたころから風・林・火・山・雷・陰も六つの内一つの性質、つまり性質を受け継ぐ<sup>カタストロフ</sup>の。ちなみに私は火の性質よ。<sup>カタストロフ</sup>つまり、本来なら私は火属性の攻撃

しできない」

「ちよつと待て！」

俺はエリーの話にストップをかけた。

「じゃあ、あの時はどうなんだ？お前が言うようにどれか一つの性質カタストロフの技しか使えないじゃあ、お前はどうなるんだよ」

俺はエリーに向き直ってエリーに向かつて指を刺した。

「お前はあの時火以外の性質カタストロフの技を使っただろう？あれはどうなるんだよ。あんなことがあるならお前がさっき言ったこととかなり矛盾を起こしちまうだろ？」

「言つたでしょ私は。本来ならつて。私は例外中の例外。私みたいな奴なんて今まであんまり会つたこと無い。ま、歩きながら話しましよ」

そういつてエリーは俺の先を歩いていった。

「おい、俺の家分かつてんのか？」

「当然でしょ。あなたのことは何もかも調査済みよ」

エリーは立ち止まり、俺のほうへ振り向いた。髪の毛が風になびかされ、流れていくように揺れていた。

「何してるの？【殺し神ころしがみ】」

「・・・・・・・・」

確かに、徹底的に調べ上げてみたいだな。

俺は納得したように溜め息を吐き、エリーの後ろから付いていった。

時は流れここは俺の部屋だ。

「じゃ、ここまでの話を整理させてもらつぞ」

「勝手に」

俺のベッドに腰掛けて腕を組んでるエリーの前で、自分の唇を覆い隠すような、つまり俺が考えを整理するときの癖をして、エリーから聞いた話を一通りに整理してみた。

彼女が俺をつけていた理由は「桐ヶ谷一真および、桐ヶ谷一真の力の観察及び監視」と言うことだ。事件の発端は十一年前にあった現実リアルと仮想の境界線の崩壊が事を起こし続けていたと言う。両世界の影響を考え対策として立てられたのがPPA（Parallel Paradox Assault）と言う組織らしい。さらにその組織で戦闘の精鋭たちにはPLD（Parallel Link D e v i s e）と呼ばれる、言うなれば向こう側の力をこちら側で発動及び、零れ物ジャンクをサーチして近くに寄ればあの時間が止まった空間パラドックス境界を自動的に発生させる携帯端末らしい。その所持者のことを一般に『リンカー』と言うらしい。もちろん、所持者の意で境界を発生させることも可能らしい。つまり、テロや反旗を翻した奴は消されるというわけだ。そして、その空間なら生まれたときから持つてくる風・林・火・山・雷・陰の六つの内どれか一つの性質カタストロフの技を発動できるらしい。（全ての性質カタストロフを使えるエリーは例外らしいが彼女の本質は火の性質らしい）

そして、ここからが本題だ。彼女の言うように風・林・火・山・雷・陰のどれかの性質を持つてなくてはあまりにもおかしい。俺に至っては例外中の例外だ。何せ、俺は仮想側ゲームの人間ではない現実側リアルの人間だ。そんな奴がPLDを手にすることなんてできるはずが無いと彼女は言っていた。今はツンとして俺から目をそらしてるけど……。

そして、本質的な理由、「桐ヶ谷一真および、桐ヶ谷一真の力の観察及び監視」と言うエリーに課せられたらしい。そして、彼女はこんなことを言っていた。

あなたからは察知できなかったのよ。六つの性質カタストロフどれからも察知できなかったのよ。つまり、あなたは特異性質フォースなのよ。

そついう事か。俺は左手で右目を隠すようなあの仕草をした。意識はあるものの、いつもこの癖をしてしまう。たぶん、する前の記

憶は丸ごと吹き飛ばんだろう。気づいたときだからな。

まとめてみよう。こいつは俺があまりにも摩訶不思議すぎて自分から進んで俺の観察を志願した、と言う事だ。しかも、俺が最後に勝手に発動したソニックブレイド、あの構え方はどう見ても「アステス・フェンリル」の最速その物だったと言う。しかも、俺の右目には紋章が浮かんでいたらしい。魔方陣のような、紋章が。

「つまり、お前は私たち側の存在なのかも、お前たち側の存在なのかも分からないと言うことだ。いや、お前は存在しているのからな。お前の存在は………」

俺は息を呑んだ。

「存在していないのかもしれない」

## STAGE 2

「俺が・・・存在しない、だと？」

俺はあまりにも衝撃的過ぎて、俺の脳の要領をもつてしても、頭の中が真っ白になって呆然とした。いや、むしろ落ち着いたと言うのが正しいか。

「あまりびつくりしないのね、お前」

エリーは足をパタパタさせて俺の顔を覗き込んだ。

「いや、びつくりしてるよ。話が衝撃的過ぎてむしろ落ち着くっていうか、なんていうかな・・・」

「・・・」

「よく分かんねえな。俺でも分からない」

「変なの」

エリーが滑稽な者を見たというような笑みをこぼした。何だよ、馬鹿にすんなよな。お前だったらどうなるんだよって聞きたいことだが、これは友里と同じパターンだな。聞いたら逆上されて戦闘勃発になる。そうなれば俺はフルボッコだ。俺はずれた伊達眼鏡を押し当てて位置を戻した。

「で、俺はどうなるんだ？」

「なにが？」

「俺はこれからはお前に付きっ切りにされるっていうのか？」

「たぶん、ね」

俺は滑稽すぎて口元で笑った。そんな深刻そうな表情すんなよ。知りたければいくらでも知ればいい。お前たちが知ること、俺もエリーが言った、「桐ヶ谷一真は存在しない」と言う意味が分かるかもしれない。

「わかったよ・・・」

俺はしぶしぶ認めた。それを象徴するかのようにはじょうがないと言う表情を浮かべながら後頭部を掻いた。

「へ？」

「俺が母さんをうまく言いくるめて、お前の部屋を確保させておいてやる。だから、お前は居候と言っ形になるな」

俺はズビシつとエリーに向けて指を刺した。

「それに、どうせ宿が無い間は外で寝てたんだろっ？」

「へ？私そんな事何も」

「お前の頬だよ」

「頬？」

俺の言葉を聴いて、エリーはごしごしと自分の頬をぬぐってみせた。

「どうせお前たち側の科学で体を清めてるんだろが、頬についた新聞紙の印刷はしっかり取れてないようだな。お前の足や腕の肌の色と比べて、お前の頬の肌の色はほんのちよつと黒ずんでる。しかも、お前がこの一週間俺の家を嗅ぎ回ったって事は、この仁舞市を探しまくったって事だろ？すぐに見つけたんなら俺の学校に顔を出すのは三、四日ぐらいで充分。でも、お前がこの学校に顔を出したのは一週間ぐらい。俺も一回この町を一周したことあるけど、そのときは俺も一週間ぐらいだったかな。そんだけ時間かけたことは、お前も自分の足で調べ上げたんだろっが、食料は大丈夫でも体だけは、大雑把でしよっがなかつたらしいな」

「.....」

「凶星か？」

「頬の黒ずみと私がお前の前に姿を現したときの日数から私が次にお前の前に姿を現した日数で、そんな事まで予測できるなんて、ほんとにお前は何者？」

同じ事聞かれたな。あの時も。

「言っただろ？世間じゃ俺は高校生探偵だつて言われてるんだよ」

「高校生・・・探偵？」

エリーがその単語を呟いた瞬間、エリーが俺の目の前でわざとらしく噴出した。

「んだよ……。俺だつていつの間にやらそうなつちまつてんだよ」

「いつの間にやらつてなによそれ」

エリーは笑いをこらえているせいか、涙がうつすらと見えている。こいつ、とことん俺を馬鹿にしてやがるな。俺は苦笑いを浮かべ、どう毒づこうか考えていた。考えていたが、結局その方法は見つからなかった。

「だ〜か〜ら〜、何でそつち方面しか行かないんだよ!!」

俺はエリーを後ろに立たせ、俺は母さんを説得及び説教を繰り返していた。もうさつきから同じパターンばかりだ。全く、なんだよこの母親は！困ったもんだな！

「でもお、一ちゃんいちが女の子の居候を許すなんて珍しすぎてね〜」

「珍しい？いや、そこは話になんか乗ってない！つまり、桐谷の居候を許すのか？許さねえのか？」

「どうしよっかなあ」

俺の母さん、桐ヶ谷真由子きりがやまゆこは小悪魔的な笑みを浮かべ、俺をじと目。説得にこんな時間かかるなんて予想外にもほどがある。ま、いつもより時間はかかるってことぐらい予想したけど、居候って言うスケールはあまりにも大きくなりすぎたのだろうか。泊めると居候はやっぱりスケールがあまりにも違いすぎたんだろうな。

後ろに居るエリーは痺れを切らせたんだろうか、俺を押しわけ、俺と母さんの間に入った。痛ってえな。思いつきり強くやりやがった。

そして、両手を合わせて、まるで神様に祈るかのような表情を出した。どこぞの訪れシスターかよ、お前は。

「お願いしますおば様、アメリカから久しぶりに帰って、当分の間ホテル暮らしをしてたんですけど、そろそろ宿泊費が足りなくなつたんです。でも、だからと言ってあそこを抜け出すと泊まる宛て

も無くて・・・」

すると、エリーが俯き涙をブワツと浮かべた。エリー、お前そんなキャラだったけ？キャラ作りうまいな、お前。

今日始めてこいつに本気で感嘆した。

「夜で道端で寝るのはあまりにも怖くて・・・」

寝てただろ。お前。んで、俺の予想が正しければ不良どもに出会うたびに全員フルボッコしてきたんだろ？今まで。しかし、そんな事口が裂けてもいえない。言えばエリーと戦闘勃発だ。確実に消される。怖いなあ、この世界。

経つことおよそ三十分、やっと。母さんもノックダウンしてくれた。・・・俺なんか仕事奪われてほとんどエリーに任せっ切りだったけどな。

エリーが俺の部屋に入るやいなや、どかつと俺のベッドに座り込んだ。おいおい、すごいキャラの豹変振りだな。さっきまでは気弱い淑女だったのにな。ほとんどシスターに近かったな。雰囲気はな・・・。

「んで、俺の性質カタストロフはどうやって調べるんだ？最悪、お前とは戦う気は無いぞ。どうせボッコボコにされるしな」

「さっきはしたじやない、私を。何なの？あれ」

「ジークンダー 截拳道だけど？それに格闘術なら負ける気はしなかったからな」

「ふうん、あれが截拳道・・・ね。どこが？」

「俺も思ってるよ」

警部、俺にも仲間ができたぜ。やっぱりあれは截拳道じゃないんだよ。よける美学とか、ほとんど攻めないしな。横鴨一門の截拳道は。守ってばっか。避けてばっかだもんな。ま、反面世界一美しい截拳道って言われてるけど。

「んで、もう一度言っぞ。俺の性質カタストロフはどうやって知るんだ？」

俺のこの続けての質問にエリーは悪戯っぽさを含めた笑みを浮か

べた。

「心配なしよ。もう、ジュールが反応を掴んだらしいから」

「.....」

戦うのは変わらないらしいな。

俺は息を呑みながら、右手で強い握りこぶしを作った。

### STAGE 3

「行動早いな」

「私じゃないわ、私のサポートブレインのジュールよ。しゃべり方完全に馬鹿だけどそっち方面なら私よりも頭が切れるわ。ブレインとしては適材ね」

「そうかい、そりゃあ良かったな。漫才みたいなトークができて毎日が楽しいだろ？」

俺は思わず笑みを浮かべて、噴出した。あれ？気づいたら眼鏡が……。伊達眼鏡でも汚れたら変な視界だ。俺は眼鏡を外して、眼鏡拭きをポケットから取り出して満遍なく眼鏡に付いた汚れを拭いた。エリーには俺が眼鏡を外すのは珍しく見えるのだろう。エリーは俯いてる俺の顔を覗き込んできた。エリーの視線に気づき、俺はエリーの方へむいた。エリーのあまりにも不思議な物を見るような表情に思わず噴出した。

「んだよ。なんか変か？」

俺がそういうとエリーはいきなり頬を赤らめて、向こうへ向いた。

「べ、別になんでもない。何にも無い！」

「何でそう必死になる？」

エリーはふてくされたような表情を浮かべて。俺の顔を見てきた。

「……………」

「……………」

んだよ、この沈黙の時間は。面倒くさいことになりそうだな。その沈黙の時間に痺れを切らせたのかエリーは俺のほうへ振り向いて怒ったような表情を浮かべた。

「うるさい！黙れ！それ以上言うな！」

「んだよ、耳に響くなあ。何も言っただけじゃねえか」

ホントにうるさいなあ。首をやたらめったに振るもんだからこいつの髪の毛が俺の顔面に当たりそうだ。ま、もちろんそんなことは

無いけど。俺は迷惑そうな表情を浮かべて耳を塞ぐように指を耳の穴に突っ込んだ。ミスったなあ。こいつこのまま路上で寝かせるのが正解だったな。俺は顔をしかめて首を横に振った。

するとエリーがいきなり窓を開けた。

「どうした？高飛びでもする気か？」

「んなわけないでしょ！ちよつと屋上で涼んでくる」

「屋上って・・・」

俺は苦笑いを浮かべて、エリーがベランダの手すりに足をかけてひよいつと飛び上がって屋上に上っていくのを見送った。

「ああもうむかつく！」

『エリー・・・』

PLDの無線の奥では恐らくジュールは苦笑いを浮かべてるだろう。ジュールも途中経過を知っていた。知っていて余りにもエリーが怒ってる理由が分からない。たぶん、自ずと分かるだろうと思ってるから、ジュールは何も言わない。

「なんなのよ、何であいつは私の顔を見るなり、あんな顔をしだしたよ！」

エリーは子供が駄々をこねるかのように上向きに寝転がって手足をばたつかせて暴れた。たぶん、下に居る一真は「何やってんだ、あいつ」とか呟いているに違いない。それがどんな表情か大体予想できる。予想できるせいでさらにエリーの怒りは最高点に達してしまふ。

『やめない？エリー。カズマが怒っちゃうヨ』

その言葉とともにエリーが静かになった。パターンと手足の暴走を止めた。

「分かってるわよ。でもなんだかむかつく・・・」

エリーは唇をとんがらせて夜空を見上げた。この仁舞市は夜はほとんど真っ暗だ。街灯がちらほらとあるだけで後は何にも無い。エ

リーの目の瞳には仁舞独特の星空が映っていた。

「ジュール……」

『なんだい？』

「何で私怒ってるんだろ……」

『さあ、ボクには分からないネ。でも、予測はできる』

「な、何？何でなの？」

エリーが無線越しにジュールに噛み付いた。向こうではジュールの苦笑いが聞こえる。

『まあ、その理由はエリーが自分で知る必要があるネ。ヒントは、たぶんエリーが始めて持つ感情じゃないかな？』

「何よ、何で遠まわし？」

エリーが呆れたような表情を浮かべ、無線をにらんだ。もちろん、そこにはジュールの顔は認識できないし、ジュールもエリーの顔が認識できない。それでも声の調子で大体どんな顔が分かる。ジュールに呆れられた。そう自覚した瞬間、エリーの感情の奥からどうしようもない感情がどっと流れ出てくるのが感じた。

その感覚に浸っている間に、なんだか眠く……。

「エリー！」

俺は屋上に居るエリーの様子を見ようとエリーみたいにベランダの手すりに足をかけてジャンプしてみた。おお、案外簡単に登れるな。そういう感嘆が俺の体の内から湧き出てきた。屋上に上つてみるとエリーが今にも眠ってしまいそうな状態になっていた。何だか悪戯心が騒ぐな。びっくりさせやろう。試しにこいつの名前を大きな声で呼んでみようか。

「エリー！」

「う、うわわわ！」

エリーが驚いて手足をばたつかせて上半身を起こした。あれ？余りにも無防備だから、大声でもびっくり物だったのか？

エリーが手足をばたつかせたせいで彼女自身が斜めのこの屋根を転がり落ちそうになっていた。おいおい、そうなたら俺も被害を受けんのかよ。こわあ。エリーが何とか体勢を整えてくれたから俺はなんとも無かったけど。

エリーはワタワタとしながらあわてた表情で俺の顔を見てきた。

「なん、何のよう!？」

「いや、俺の屋根の上が妙にうるさいから見に來ただけだ」

「……………」

エリーが凶星でも食らったかのような表情になった。やっぱり暴れてたな。

「何してんだよ、お前うるさいぞ?」

「何よ!関係ないでしょ!」

「お前は暴れて俺の家をつぶす気か?」

「どんだけ私の力が強いって思ってたのよ!」

「分からん。でも、お前ならマジでやりかねない」

「ううぐぐ」

エリーは噛み付いてきそうな犬のように犬歯をむき出しにしていた。しかし、しばらくするとエリーは勝ち誇ったような笑みを俺に浮かべてきた。

「お前、何も分かってないんじゃないの?私もパラレルリンクしなきゃ私も運動能力が急激に落ちるって事を!」

「でも、お前ならそれなしでもやっちまうだろ?」

何だか楽しくなってきた。一生こいつをいじり倒しとこ、て思うぐらい楽しかった。さあ、お前ならどうこれに返す?エリーはしばらく黙り込みを決めていた。そうになると面白くない。だからといってこちらから仕掛けたんじゃない意味が無い。

さあどうする?と思いつつエリーの顔をうかがってみると、俺に今にも噛み付いてきそうな表情を浮かべていた。その表情が余りにも俺にとっては滑稽で俺は笑ってしまった。そして、どうやらそれで完全に怒りのスイッチが入ったらしい。喧騒な表情で俺をにらん

でくるや否や、立ち上がって俺にとび蹴りをかましてきた。いつもの俺ならかわすが、もし、かわしたらエリーが下に真っ逆さまだ。だからここは……。

俺はエリーのとび蹴りの着弾地点を予測してそこに手をやった。案の定、エリーのとび蹴りは俺のどてっばらに命中する算段だったらしい。しかし、甘かったなエリー。かわすことができるって言うことは防ぐこともできるんだよ。

俺の右手はエリーの脚を掴んでエリーが頭を屋根に打ち付ける前に、すばやく体勢を低くして足を持つ手を引き、（その瞬間エリーの「ひゃあ！」という悲鳴が聞こえたがそこは無視だ）エリーの頭に手を伸ばした。そして、綺麗にエリーの頭をキャッチ。すごいな、俺。普通できないぞ？

エリーを未完成ながらもお姫抱っこ状態にしてしまった俺は顔面ぶん殴りを覚悟したが、一向に何にも飛んでこない。それどころか不思議な物を見る目で、しかも頬を赤くして俺の目を見つめていた。しかも唇も小刻みに震えている。やばいな。このフラグは。俺は危ない体勢になっていることになっていることに気づき、エリーをすぐに下ろした。エリーは体を下ろされた後でもしばらく硬直していた。ゲームで言えば、技発動後の遅延スキルディレイみたいなものだ。

「あ、ありがとう……」

ようやく口を開いた。エリーなら「今頃？」とか言いそうだが、俺はエリーじゃない。

「そうか。もうしでかすんじゃないぞ？」

俺は顔をほころばせながらエリーに言った。エリーは俺の顔を見るや否や顔を赤くして俯いた。なんだ？こいつ。変なの。俺は横目でエリーを見ながら、屋根からベランダに向かって飛び降りた。

エリーの心臓は今でもでかい鼓動を発していた。

（なんだろう、この感じ）

変な違和感があるが、いつまでもこんな感じで居たい様な変な感じがエリーを襲っていた。エリーは心臓の鼓動を抑えようと胸の心臓があるだろうという部分を掴んだ。それでもこの高鳴りはなかなか収まらない。

(言えない。だってあいつは存在しないかもしれないから)

エリーは一真のあの面影がそこに居るのかもしれないというようなまなざしで屋根の縁をみた。

(笑い顔がよかったなんて)

「何やってんだ？あいつ」

まだ降りてこない。せつかく母さんがエリーのために空けてくれた部屋に布団を出してやったのに、ほんとに何やってんだ。しかしここから屋根に上るのは無理がある。行けるのは俺のベランダからか・・・いや、そこぐらいか。俺はひとまず布団を出し終えて、俺の部屋に向かってその空き部屋を出た。

「エリー！降りてるかあ？」

向こうでは返事がない。じゃあ、降りてないって判断していいんだな？じゃあ、遠慮なく。

俺はドアノブに手をかけて、ドアを開いた。

そして、俺が絶句した。

「.....」

「.....」

エリーが下着一枚姿だから仕方がないよな。俺だって男だから、そんな光景見たら絶句するに決まってるだろ？清楚な白色の下着が、遠慮深く覆っていた。

さあ、どうしよう。言葉が見つからない。しかも、俺でも気づかぬ間にエリーの半裸の姿を凝視。・・・いや、もちろんやらしい目じゃないぞ？エリーの顔は見る見るうちに紅潮していった。あの紅潮が有頂天に達した時が俺の最期だ。エリーの怒りの鉄拳が俺に飛

んでくるだろう。

「あ、あの・・・」

「なに？」

怖いなあ。エリーの表情に怒りの表情が見えない。いやエリーの顔じゃもう表しきれないのだろう。証拠に、エリーの目元がぴくぴく動いて、唇の片方が妙につりあがってる。

「すみませんでした！！！」

「一真のばかー！！！！！」

あれ？名前呼びになった？そんな事思ってる場合じゃない！俺にめがけてとび蹴りが飛んできた。頭を下げて謝ったもんだから。避けるには体勢が悪い。半裸エリーのとび蹴りが俺のみぞおちに見事にクリティカルヒット。俺の体はノーバンで壁に背中から激突するという、漫画みたいな笑えない展開になった。こいつ、友里よりもタチが悪い。俺の意識が一瞬吹っ飛んだと思ったら、エリーの「フンッ！」とか言う声を聞いたと思ったら、ボタン！と大きなドアの開閉音が廊下に響いた。当分エリーに逆らえない。とんでもないじやじゃ馬娘だ……。俺は頭を抑えて大きく溜め息を吐いた。やっぱりこいつなんか泊めるんじゃないかった。俺の命は後何日持つだろうか……。

**STAGE 3 (後書き)**

会話ばつかだな・・・。

## STAGE 4

結局俺がとび蹴りを食らって部屋を閉め出されたわけだが、このままでは俺は寝ることができない。というわけで、頃合いを見て、もう一度部屋に突入してみようかという算段を立ててみた。しかし、とんでもないダメージだ。こうなるくらいならかわしとけば良かった。俺は未だに痛む背中をさすりながら、階段で下に下りた。

こういうときにいつも悪いパターンが起きてしまう俺だ。

そう、こういうときにいきなりピンポンという愉快的インターホンの音が家中鳴り響いた。母さんはもうご就寝状態。こうなってしまうえば、地震が発生してもおきないもんだから、俺が出なくてはいけない。

「はあい・・・」

俺はやる気の無い声質で、インターホンに出た。

『か、一真。私』

「友里か？」

最悪だ。このパターンはどうしようもない。どうする？俺？とつとと友里を追っ払うというルートか？それか、正直にドストリートに全てを打ち明けるか。それが、うまく頑張ってはぐらかすか。

最初のルートならば、怪しがるだろうし、次に考えたルートを選べば俺の命は今後無いと思えばいい。じゃあ、最後に考えたルートを選ぶか。頼むぞ、エリー。ここでお前が出現なんかしたら、お前が知りたい情報が一気にパアだからな。俺は手を合わせて、神頼み。俺は玄関のドアを開けた。

玄関の前には友里が何かの小包を持ちながら俺の玄関の前に立っていた。

「なんだ？それ」

「これ、父さんが出張から帰ってきて、大阪からお土産だって。はい、たこ焼き」

天使のような笑みを浮かべながら友里が小包の袋ごと俺にそれを手渡した。袋からたこ焼きソースのおいがあふれ出てきた。ん？これはまずいよな。俺はたこ焼きの入った袋をぎゅっと締めて匂いが漏れ出さないようにした。友里にはこの行動の意味は一生分かるまい。

「それだけか？」

「うん、それだけ」

友里はゆっくりと俺を眺めるように俺の目を見てきた。その後、ふうつと息を吐き、友里は一步下がって、何も言わず手を振ってそのまま背を向けて、走っていった。

「……ん？なんだか、全てが安泰に済んだような気がする。何だかんだ言って、今回は運がよかったみたいだな。俺はドアを閉めて、袋の封を開けた。その瞬間袋にたまっていたソースの匂いが一気に飛び出してきた。エリーは果たしてこれに飛びついてくるのか？

「うわ！」

服を着替え終わったエリーが階段の下で、じっとこちらを見ていた。全く気づかなかった。すっごいじと目で俺を見ていた。こわあ。エリーからは恐怖心ばかりが植えつけられる。あれって不機嫌なのかなあ。俺はすぐすごと引き下がった。

「一真……」

「な、なんだ？エリー、俺をいきなり名前呼びとは、どうした？俺は顔を引きつらせながら聞いた。

「あれって？」

「ああ、あれは俺の幼馴染の小野沢友里。て、知ってるだろ？同じクラスだろ？」

「さあ、同じクラスの奴なんか興味ないし、あんまり顔も知らない」

エリーはぶいっとそっぽを向いた。

「そうか？じゃあ、覚えとけよ。あいつがヒステリックを起こし

たらどうしようもないぞ？」

「へえ、でもそんなのには興味ない・・・」

「おいおい・・・」

やばい。やばいぞ？この緊張感。バトル勃発か？俺は息を呑んだ。そろそろスタンバイしたほうがいいか？俺はひそかにポケットに潜ませていたPLDを掴んだ。

しかし、エリーは俺の予想を反して感情を制御して、大きく溜め息を吐いた。あつぶねえ。本当に命拾いした。

「まあ、いいわ。一真が誰を好きでいようと私には関係ないし」「そ、そうか」

俺は顔を引きつらせながら苦笑いを浮かべた。やっぱり友里にも正直に言ったほうがいいかなあ。俺に訳の分からん監視がついてしまったとか言う名目で、全部話しちゃおうか。

ん？さつきからエリーの視線がどう見ても俺のほうへ向いていない。エリーの視線をたどってみると、そこには俺が持っているたこ焼きの入った袋にたどり着いた。

「まさかお前以外に食いしん坊か？」

「ば、馬鹿！そんなわけないでしょ！」

エリーは顔を真っ赤にして俺に背中を向けた。しかし、それでも顔だけこっちに向いてしまう。やっぱり興味あんだな。俺は溜め息を吐いて、エリーにしゃべりかけた。

「分あったよ。興味があるんだろ？どうせ、友里は俺と母さんで食うだろうつて言う設定で持ってきてくれたんだろうつから、おれとエリーで食っちゃおうか」

その言葉にエリーは思いのほかのような表情を浮かべて、俺のほうへ振り向いた。全く、素直じゃないな、こいつ。俺は笑みを浮かべながら小さく溜め息を吐きながら、電子レンジのほうへ歩いていた。

「あ、あのさー！」

エリーが大きな声で俺を呼び戻した。

「ん？なんだ？」

「あんまり温めないで」

「お前・・・猫舌だったのか？」

「・・・・・・・・」

たしかこいつは「火」の性質カタストロフだったよな。たこ焼きの熱さより、断然お前が操ってる炎のほうが熱そうなんだけどなあ。てか、熱すぎて熱さも感じないんじゃないのか？

ま、体の内側だから、余計熱く感じるんだろ。俺はそう思い勝手に納得して、じゃあ、振りだと思っただけでかなり温めてやろうと思っただ。

「あつっ！」

エリーがいきなり口の中をやけどした。しっかり冷ませよ。俺は苦笑いを浮かべて、エリーの口を火傷をしたときの顔が赤くなる様子を見ていた。

エリーはたこ焼きをほふほふと口の中で冷ました後、頃合いを見てしっかりと歯で噛み砕いて飲み込んだ。

「しっかり冷ませよ・・・」

俺はエリーに対して笑みを含めながら言った。

「あんまり温めないでって言ったのに・・・」

エリーはうつすらと涙を浮かべながらぽつぽつと呟いた。そのままエリーは爪楊枝つまようじでもう一個を突き刺し、穴を開けて中に向けてふうふうと息を吹きかけて中身の暑い部分を冷ました。なるほど、なかなか考えたな。一番熱い部分をそういう風に冷ますなんて。ホントに考えたな。ま、俺はそういう風にしなくても平気だけど。

気づきゃあ、十個ジャストあっただけのたこ焼きが全部平らげられてしまっていた。時間かけたけど、エリーがなかなか食い終わらないしな。

「さて、エリー」

一夜明けた今日は土曜日で学校は休みだ。警部も来なければ、友里がいきなり乗り込んでくることも無い。いつもの俺なら平和な日だったというだけで、済むのだが、今日はそういうわけに行かない。エリーの仕事の手伝いをしなければいけない日なのだ。俺はいつもの普段着に着替え、エリーに向き直っていた。エリーは向こう側から転送してもらった普段着を着ていた。ハイネックの黒いトレンチコートに、小さいスカートをはいていた。後ろから見たらまず、そのスカートは見えない。黒いトレンチコートの下は、ノースリーブの赤い服だという、なんともラフな格好だ。どうせ下着も取っただろう？

「なに？」

「俺の性質カタストロフを調べるのはいい、戦闘を行うのもいい。けど、その敵がどこにいるかわかるのか？」

「わかる。お前のPLDは知らないけど、私たちのPLDは零れ者シラをサーチ出来る。ま、三百メートル以内なら反応するから、探すのは難しくないわ。ただ、あの狼型の零れ者ジャンクみたいにスピードが速いやつなら、すぐに三百メートル圏外に行っちゃうから意味ないけど」

「おい、そのまま言い続けたらその零れ者ジャンクとは戦えないってことになるぞ？どうするんだよ」

「そこは心配ないわ」

エリーは大きなため息を吐き、俺のほうへ向いた。

「そのためにジュールがいるんでしょ？」

「？」

俺が首をひねった瞬間、ピーとかいう機械音が俺のPLDから聞こえた。俺がポケットに突っ込んでいたPLDを取り出すと、縁にあるランプのひとつが赤く点滅している。どうするんだ？これ。

と思っただけだった。

『はぁーい！カーズマ！』

「ッ！」

びっくりしたあ。一瞬心臓が止まるかと思った。いきなりPLDから声が聞こえるんだからな。エリーは大きく溜め息を吐いた。

「ジュール、一真がびっくりするでしょう？」

『ごめんごめん。やっと繋がってくれたからうれしくて興奮しちゃってネ。じゃあ、自己紹介からネ。あ、カズマは良いよ。エリーから全部聞いたから。ボクはジュール。エリー及び、キミのサポートブレインだよ』

「俺の？」

「ウン。総長が、キミを勝手にPPAに入れる！とか喚き散らかしてたけど、そんなこともいかない。だってキミは現実側リアルの人間。でも、キミは観察対象だから、目を離すわけでもないし、戦闘力も高い。で、サポートぐらいはと思って、君のサポートブレインを勤めるんだヨ。エリーの勧めでネ』

「ジュ、ジュール！」

エリーが俺のPLDの向こうで爆弾発言をした(？)ジュールに向かつて吠えた。こいつ……。全く、余計なことしやがって。

俺はエリーの噛み付くような横顔を見て、口元で笑った。

『まあまあエリー。それだけエリーがカズマを大切にしていることは分かったから』

「べ、別に大切ななんか思っていないから！」

エリーが顔を赤くして俺のPLDから顔を離れた。向こうではジュールの苦笑いが聞こえる。こんなにはつきり聞こえるもんなんだな、無線って。

「で、ジュール。反応はしっかり追ってくれてる？」

『もちろん。ボクはその手の話題には強いからネ。君たちの地点からは言うほど遠くない。むしろ馬鹿なのか君たちのほうへ一直線だね。ただ、スピード結構速いからすぐに会えるんじゃないかな？』

「じゃあ、外に出たほうがいいって訳ね」

『まあ、そういうことになるネ。ほら、早く外に出ないと。境界パラドックスが発生してしまうヨ?』

「うん。一真行きましょ」

「行くってどこへ?」

俺には話の筋が読めない。どこに向かうんだ?

「決まってるでしょ! 零れ物ジャンクがこつちに向かつてる。戦うなら外のほうがやりやすいでしょ?」

「出るだけか?」

こんなこと俺が聞くもんだから、エリーは冷たい目を俺に向けてきた。

「何言ってるの? 聞いた? さっきの話し。わざわざこつちに向かつて来てくれるのよ? 向こうが私たちの半径二百メートルに入った途端、境界パラドックスが発生するの。そうやって周りの建造物とかを守ってるのよ。でも、その空間では時間が止まるから、時間が進んでる私たちはそれに干渉することができない。こんなところで閉じこもってたら出れないわよ? て、昨日言ったんじゃない? 私」

「う……」

言っただけ? 言っただかどうが忘れた。

「とりあえず!」

エリーは俺の前に立ち上がった。

「早く出るわよ! お前も知りたいんでしょ? 自分の正体を」

「……」

その通りだ。そうでなければなんで俺はこんなじゃじゃ馬娘を俺の家に入れたんだ? 俺はエリーのようにPLDを腕に付けて、エリーが走って出て行った後を追った。

『準備はいいカイ?』

「ええ、後どんぐらい?」

『あと五秒』

四・・・三・・・二・・・一・・・。

その瞬間、俺の視界がフラッシュバックを起こした。あの時と同じ感覚だ。確かあの時は・・・。

フラッシュバックがなくなったら俺の視界全体は黒ずんでいた。景色も、全部がだ。それが、全ての時が止まった合図だった。

その中で唯一動けるのは俺とエリーと、後は・・・。

「来たようね」

エリーがそう言うと、それを合図だったかのように上から俺たちの前方十メートル先で何か落ちてきた。

「何だよ！何なんだよ！ここは！何で時間が止まってんだよ！」

俺たちの目の前に居たのは水色でウサギ型の明らかに俺とエリーよりもサイズが小さい零れ物だ。いや、こいつは確か・・・。

「【イラビット・チルドリオン】か？」

【イラビット・チルドリオン】。確かこいつは「フォーリング・ダンス」の最初のクエスト四つの内の一体のボスだったな。

「うげえ！俺の名前！？すげえ！俺ってすげえ！そんなに有名なのか！」

「うっせえなあ。子供声ではしゃぎ回りやがって。確かにこいつはスピードあるなあ。アステスよかましかだったけどな。なあ、エリー」

「そうね。ここで黙らせときましょ。まあ、まだ何にもしてない駆け出しだけど、ここで摘んでおきましょ」

エリーは目をつぶって溜め息を吐いた。

「そうだな」

俺は自分の左腕にはめてあるPLDに目を向けた。そういえば、どうやってあの剣を出すんだ？

「おいおい！俺は放って置きか！？そんなことするお前たちは、処刑だ！！！」

チルドリオンがいきなり高く飛び上がった。そういえば、こいつの本当の自慢はジャンプ力だったな。なるほど、等身大だとこんな

に高かったのか。俺の身長の高さ五メートルぐらい高くまで飛び上がっていた。

俺はそんな感嘆の感情を持ちながら、それを見送っていた。

「一真！何してるの！見とれてる場合じゃないでしょ！」

エリーは俺を思いつき蹴飛ばして、チルドリオンの空中からのジャンプの衝撃波の射程外に飛ばしてエリーもその反動でチルドリオンの空中からのキックの衝撃波の射程外へと飛び出た。チルドリオンが思いきり強く着地した地点からは、強い衝撃波が発生して俺の前ギリギリで消滅した。危ねえ。そんで持つて痛い。ホントに思いつき蹴飛ばしやがったなあいつ。ま、そのおかげででかいダメージは防げたけど……。

向こうに居るエリーは自分の右手にあのバスターソードを出現させた。どうやって出すんだ？あれは。あれが無ければ出しようもない。

「PLDの脇にあるレバーを自分のほうへ引いて！そしたらあのときの武器を思い浮かべて！それだけであのときの武器が出てくるから！」

レバー？これのことか？PLDの脇にちょうど指が入るような大きさのレバーがあった。これを引くのか？

俺はエリーの言われたとおり、そのレバーを引いた。

## Link START

あの時と同じだ。俺の頭の中でそういう機械音が聞こえたと思ったら、俺の体のうちから何かの力が入ってきた。

「やるなあ！お前ら！もういつちよ行くぜ！」

チルドリオンがエリーに向かって水平ジャンプした。このパターンはまずい奴だ。

「エリー！」  
俺がエリーの名前を叫んだとき、エリーの呟き声が聞こえた。

## CODE FLAME

エリーの髪型や瞳の色が赤色に変色した。そして、紅蓮の炎がエリーの回りを取り囲み、その炎がチルドリオンの突撃からエリーの体を守った。守ったというより、その炎がチルドリオンをくるみ、そのまま弾き飛ばしたというのが正しい。チルドリオンは激しく地面に打ち付けられ、立ち上がるには時間がかかった。そういえばこいつはひるむとなかなかリカバリーしなかったな。

その間にエリーは俺に目配せをした。そうだったな。今回はこいつをただただ倒すことが目的じゃないもんな。俺はすつと目を閉じてあのときの武器を思い浮かべた。白く光ったり黒く光ったりする刀身を持った片刃剣。俺の意識の呼応して、激しく光る刀身。そう俺が想像すると、俺の手元に粒子が集まってきた。そして、それがあのときの片刃剣を形成した。俺はその剣の黒い柄を掴んだ。その剣はあの時と同じように黒く、白くと交互に発光していた。たぶん、エリーの言うように俺の右目には紋章が浮かんでるのだろう。(俺にはわからないけど・・・)

「おいおい！お前ら！二対一かよ！どういう了見だよ！」

「気にしないで、お前の相手はあいつ。私は手を出さないわ」

エリーは手に持つてるバスターソードを消滅させた。それでも尚エリーの髪の毛の周りには火の粉が飛び散っていた。

そうだったな、エリー。今回はお前の仕事協力だ。これで貸し借りは無しだぜ。俺はこちらに振り向いてくるチルドリオンに焦点を合わせた。チルドリオンは体を上下させて呼吸を整えているようだ。ていうか、プログラムにそんな呼吸とかあるのか？

「なんだよ！そうだったのかよ！じゃあ、お前からだな！」  
単純な奴だな、こいつ。エリーの言葉を一切疑わない。ま、疑わなくて正解だけどな。

チルドリオンはエリーの時みたいに水平ジャンプで俺に向かって一気に距離を詰めてきた。こいつは水平ジャンプで一気に距離を詰めた後、「ダイヤモンドソニック」というまっすぐ飛ぶ広範囲の真空波を飛ばしてくる。水平ジャンプを回避するのは難しい。だったら今やることは……。

「吹っ飛べ！」

チルドリオンが俺の目の前に着地するや否や耳の部分に青白く光らせた。これを待っていた。こいつがそれを発動するときは約一秒のインターバルがある。それを狙って、背後を狙う！俺はチルドリオンが技を発する前に、俺はジャンプした。

「うわ！」

思ってる以上にとんだ。人間のパワーの限界をぶちぎっている。そういえば、エリーはあの時こんなこと言ってたよな。

私もパラレルリンクしなきゃ運動能力が急激に落ちるって事を！

そう、逆に言えば、パラレルリンクすれば運動能力が急激に上がる。それだけじゃない。エリーはあのアステスの巨体を蹴り飛ばした。俺もかなり遠くまで蹴り飛ばされた。つまり、運動能力だけでなく、筋力も常人以上にいつきに跳ね上がるというわけだ。俺はチルドリオンの背後に着地して、チルドリオンが技を発動する前に一発入れた。ガイッ！という金属音が響いた。

よし、後一発だ！と思った時だった。チルドリオンが俺のほうへ向いた。

何でだよ！何でこっちに振り向けた！？

「吹っ飛べって言ってんだろっ！」

「クッ！」

俺は攻撃を無理やりキャンセルして、ジャンプした。しかし、俺は気づかなかつた。俺がかわしたらエリーに直撃してしまう。しかも、エリーはそれを腕を組んで観察するように見ていた。

「エリー！」

「来なくてもいい！」

「食らえ！」

チルドリオンの耳から大きな衝撃波が発生した。くそ、間に合わねえ。そのとき、エリーがまた呟いた。

## CODE CRIMSON

その瞬間、エリーの炎が激しく燃え上がり、炎が翼を形成してエリーの手元にはバスターソードではなく、綺麗な反りを描いた日本刀が手元に握られ、柄から刀の峯に銀色の装飾が付けられ、刀身には炎が帯びられている。髪の毛の周りに飛び散る火の粉もさっきよりも多くなっている。

「言っただろ？お前の相手はあいつだ」

エリーは刀を軽く一なぎしてチルドリオンの真空波を縦に切り裂いた。

あいつ、あんな物も隠し持ってたのかよ。エリーは赤い瞳でチルドリオンを見下げていた。

「もう一度言う、お前はあいつを相手にしてる。あいつを倒せたのなら、今度は私が相手してやる」

エリー、お前かっこいいよ。女でかっこいいって思うのは友里以外ないと思っていた。しかし、今のエリーは確かにかっこいい。

俺は口元で笑いを浮かべた。

(わあつたよ。お前は完全無視でいいんだな)  
すると、俺の頭の中で俺の声で呟きのような声が聞こえた。

### ダイヤモンドソニック

あの時と同じだ。俺の体が意識から切り離されるような感覚が出てきた。俺が剣を上に掲げると、剣に青白い光が発光した。

「え？あれって・・・」

エリーのそんな呟きが聞こえるが、俺はその声に反応できない。体が言うこと聞かない。

俺はその青白く光る剣を斜めまっすぐに振ると、真空波が発生してそれがまっすぐにチルドリオンに飛んでいった。真空波が飛び立つと、俺の意識は一気に体の中に戻った。

「終わるか・・・」

俺が呟くと、チルドリオンが真空波で傷ついた身をかがめた。

「ぐぐ・・・」

おい、これって、あの時と同じパターンか？たしかアステスもこの後・・・。

「ぐガアアアアアア！」

チルドリオンを中心に突風が巻き上げられ、俺が放った真空波が失速した。

「グガア！」

チルドリオンがノーロスでダイヤモンドソニックを発動して俺の発したダイヤモンドソニックを相殺させた。それどころか、その真空波はそれを食い尽くして、俺に襲ってきた。

「クッ！」

俺は高くジャンプして、その横長い真空波をかわした。真空波は

俺の下を通り過ぎて民家の石垣に直撃し、大きな煙を上げた。しかし、石垣には傷一つかない。こちらからは時が止まった物への干渉ができないからだ。この境界は便利だパラドックスなと思いつながら俺は真空波の着弾点を見据えた。

「ガガアアア・・・！」

チルドリオンは完全に暴走している。アステスと同じだ。あいつも身の危険が迫るとなぜか暴走をしてパワー、フィジカルが共に高くなった。こいつは多分それよりタチが悪い。暴走の仕方**も**仕方だ。いま俺の目の前にいるチルドリオンはやたら滅多に周囲にノーロスのダイヤモンドソニックを振りまいている。これでは近づけない。どうする。どうすればいい。するとチルドリオンはいきなりエリーに向けてフルパワーのダイヤモンドソニックを放った。俺のを相殺させたのとわけが違う規模の威力だ。

「エリー、かわせ！」

「・・・・・・」

全く返答は無し。代わりにエリーは天に刀身を掲げた。するとまたあの時みたいに刀身全体に炎が纏われた。

そして、それをX状に空気を切り裂き、炎はその後を追うようにX状に空中に残った。

## ヘイトフレイム

エリーは空中に浮遊しているX状の炎を横殴りに切り裂き、炎は切り裂かれること無く、X型の炎はダイヤモンドソニックを食いつくし、そのままチルドリオンの方へ高速で迫っていった。あの時、アステスは直撃した。これを食らって無事で居られるはずが無い。ましてや強くなったエリーのこの技を受けたらもう即死だろう。

しかし、今回はそうはうまく事が運んでもらえそうに無い。チル

ドリオンに直撃するかと思いきや、いきなりチルドリオンの体が消えた。理屈ぬきで消えた。俺のこの目でも見切れなかった。なぜならいきなり、エリーの体が吹っ飛んでいたからだ。

「ぐっ!?!」

エリーの体は何バウンドした後そのまま地面を滑っていた。

「エリー!」

エリーは苦悶の表情を浮かべて、立ち上がった。チルドリオンが上空から俺に向かって落ちてきた。これを食らったらやばい。絶対だめだ……。

俺はチルドリオンが着地する地点から大きく三度バックジャンプした。チルドリオンが地面に落下すると、ドガンツ!と言う規模の違うような爆音が俺やエリーの耳の鼓膜を震わせ、衝撃波の余波である突風に俺の体が大きく吹っ飛ばされそうになった。

「クツ! エリー! これはどういうことなんだよ!」

「分からない! 暴走してとんでもない力になってるのは確か! でも、なんでだろう? この前もだけど、こんなこと二度続けて起きるなんて……」

エリーの炎は今でも激しく燃え続けていた。手に持っているのは銀色の刀身をした日本刀なのも確かだ。この状態のエリーはいつもより数倍の力を発揮できるのだろう。しかし、そのエリーでさえも苦戦を強いられるなんて……。

チルドリオンってこんなに強かったけ? 確か、俺はこいつを一分足らずで倒したはずだ。それが本当に戦ってみたら、十分も経っている。多少は時間がかかるだろうが、こんなにもかかるなんて思ってもいなかった。なんだ、なにがおかしい? 俺はチルドリオンが立ち止まっている隙に、そのチルドリオンの体中を見回した。

「ん?」

なんだ、あれ。右目に紋章が……。そういえば、いまの俺の右目にも紋章が浮かんでるんだよな。

「エリー!」

「何よ」

「チルドリオンの右目に映ってる紋章、俺のと同じのか？」

「紋章？」

エリーもじつとチルドリオンの右目を見つめた。

「色は違うけど、うん。形は一緒。それがどうかしたの？」

「いや、なんでもない」

まさかな。俺の力とこいつの暴走が結びつくはずが無い。なんて  
って俺は現実側リアルの人間だ。あいつの意識への干渉の方法なんか知る  
はずが無い。

「グガアアアアア！」

「喚くなよ、小さな奴」

俺はやたら滅多に暴れまわっているチルドリオンのほうへ向き直  
った。見ていて苦しい。あいつの暴れ方を見ていて虚しく、苦しい  
だけだ。終わらせてやるよ。俺の手で。【殺し神】として。

また、俺の意識が体から切り離された。

俺は剣を高く掲げた。その刀身に、真っ赤な紅蓮の炎が纏われる。

「か、一真？それって」

そう、この技はエリーにとっては親しみ深い技だ。しかし、この  
技は俺の意識を完全に無視して発動される。

「どけ、エリー」

今度は俺の口が思い通りに動いてくれた。

俺はその炎が纏われた刀身をX状に振った。炎が空中に残留し、  
X状をかたどっていた。この技は……。

## ヘイトフレイム

俺の頭の中でこの技名が呼ばれた。俺の体はそのX状に残留した  
炎を切り裂くように斜めまっすぐに薙ぎ、炎をチルドリオンのほう

へ飛ばした。高速で飛んでいく炎は、チルドリオンを直撃した。高い火柱が立ち、しばらくすると、俺の体が剣をブンツと無造作に振り、炎をかき消した。火柱が消滅した地点にいるチルドリオンはふらふらと揺らめき、虫の息の状態だ。しかし、「グググ・・・ガガアア」チルドリオンは今も尚暴れようとする。俺はあのとときの動きを思い出しながら体勢を低くした。剣を逆手で持ち、両目の焦点を一気にチルドリオンに合わせた。そして、剣が細かい振動を放ち、俺は人間の脚力の限界をぶっちぎったスピードで迫った。

### ソニックブレイド

俺は頭の中でその技名を浮かびあげ、チルドリオンを真っ二つに切り裂き、俺はチルドリオンに背を向ける形で、体勢を戻した。

「ググググ・・・ガアアア・・・ッ！」

バキンツという音と共にチルドリオンの体が結晶と化し、そのまま、粒子となって崩れ落ちて消滅した。その粒子は、勝手に俺のPLDの中へと入っていく。俺は口元で笑いを浮かべ、PLDを見つめた。

（当分ゆっくりしときな）

俺は後ろへ振り向いてエリーの顔を見つめた。エリーは今も尚驚いている。そりゃそうだろうな。俺がヘイトフレイムを発動したからな。

「一真・・・」

エリーがそう呟いた途端、突然俺の視界がフラッシュバックを起こした。そして、風景全体が元に戻り、エリーの髪の色と瞳の色も元に戻り、全部の時間も進み始めた。しかし、俺とエリーの沈黙は破れない。

「どうした？」

俺は無理やりこの沈黙を破った。

「いや、何だろ……。いつの間に、ヘイトフレイムを？」

「その質問答えれない。俺だって何でか分からない」

俺は鼻で大きく溜め息を吐きながら、エリーのほうへ歩いていった。

「でも……」

「でも？」

「俺が普通じゃないのは分かった」

「そう……」

俺はエリーの肩をポンツと叩き、家の中へと向かった。

あり得ないことが、エリーの眼前で広がってしまった。一真が、今回見た技を全てコピーして、自分の物にしてしまった。エリーは歩き去っていく一真の背中を目で追い続けた。

(なんなの？あいつは……)

そう思った途端、エリーのPLDが鳴った。無線の音だ。

「なに？ジュール、何か分かった？」

『分かったよ。でも、これは君にだけ伝えておく』

「何で？」

『まあ、落ち着いて聞いて。彼には性質カタストロフが存在する。それは当然

り前だよね』

「まあね」

エリーは小さく溜め息を吐いた。分かりきってることを……。

『で、彼の性質カタストロフは風・林・火・山・雷・陰どれにも属さない、これも言ったよネ』

「早く、何が分かったか言って！」

早く早くというエリーの心がどんどん急かしていた。しかし、後になって聞くのがいやになると言うことはこのときは知らなかった。『じゃあ、言うよ。』仙上の意思に背き、天上の域にたどり着く

者」・・・」

ジュールがそう呟いた。

「ねえ、何言ってるの？」

「この言葉が、彼の正体の鍵のひとつだよ。ずいぶん調べまくったヨ。すると、古いデータファイルから、こんな言葉が出て、それがカズマの正体を記してたんだ」

「何なの？一真の性質は」

エリーは離れていく、一真の背中を見ながら、ジュールの言葉を聞いた。

『桐ヶ谷一真の受け継いだ性質は、カタストロフ「天」だよ、エリー』

## STAGE 4 (後書き)

長いから少しグダッてるかも知れないな……。無駄に長くてすいません……。

感想お願いします！

## STAGE 5

「よっしゃあ！今日は仁舞高校空手部夏合宿御定番！肝試し大会の始まりだあ！」

仁舞高校空手部は毎年春夏秋冬、つまり、一年に四回の合宿をしている、というのが御定番だ。今年もあるうことか、しっかりスケジュールにあわせてこの夏に合宿をしている。しかも、最初の夜に肝試しをするという、御定番があった。

今年はずいぶん張り切ってるようで、男子空手部主将、荻原健吾おぎはらけんごは肝試しの舞台である山荘にあった廃校となった校舎の前で、片手をビツと挙げて他の部員たちを決起させた。もちろん、女子も参加必至。

つまり、この中に異常に嫌がるような奴がいたりすることだ。

「や、やめようよう。なんか、不気味だし・・・絶対なんか出るとてー！」

女子空手部主将、小野沢有里だ。身を小さくし、潤んだ目で荻原のほうへ向いて体をぶるぶると震わせていた。この女の子だけはどうにも他の部員よりも異常に嫌がる。他の女子は怖がりはあるが、ここまで異常にならない。

「大丈夫だって、友里ちゃん！今回は去年みたいな二人一組じゃなくて、五人一組で行くからな！」

荻原はこういうが・・・。

「大丈夫だって、て、健吾君が怖いからでしょ！去年私を放ったらかしにしたくせに！」

友里がこんな激昂するもんだから、荻原は苦笑いを浮かべるしかなかった。と言うより、あの時は学校近くの合宿所に寝泊りになって、その近くにいる墓地を肝試しの舞台にしたのだが、思ってる以上に怖く、男子でさえ逃げ出すような状態になって笑えない展開に

なつてしまった。

あの時桐ヶ谷一真が言うように本当に見てしまったのだろう。友里にいたっては置いてけぼりにされた拳句、身がすくんで一切動けない状態になつてしまった。なかなか友里が帰つてこないもんだから、急遽桐ヶ谷一真にヘルプメール。

おかげで、高く値段をぼったくられ、しぶしぶやって来た一真はなんのそのと墓地に軽い足取りで入って行き、しばらくして一真は友里を励ましながら連れて返ってきた。あいつは鉄の感情の持ち主だ、と空手部総員が思っただろう。しかもスポーツセンスははずば抜けて、勉強にいたつてはテストを百点以外取つたことの無いとか言う。しかも、顔立ちが整っているイケメン面、もうどこ叩いていいか分からない。叩くといえ、超ゲーマーな事と、トンでもない毒舌家だということぐらいしか見当たらない。しかし、女子達からしたらそれがいいらしい……。

しかも、荻原は一真と小学生のころからの親友だ。到底悔れない隙を見せたら、そこにここぞと集中攻撃だ。今では截拳道の名手。一回手合わせしたことがあるが、全部の攻撃をひよひよいかわされて、拳句の果てには自分の体力は限界のさなか、一真に一発も食らす事ができず、一真は全く飄々とした表情で荻原を見下ろしていた。

あんなキザな野郎を思い出すだけで、無性に腹立つ。そんな自分を疑念視している荻原も居るもんだから、荻原自身は今にも頭を抱えて叫びたくなつてきた。しかし、そんな事後輩やらたくさん居る中で、そんなことする訳には行かない。しかも、ましてや空手女王の小野沢友里のすぐ傍だ。もし、そんな思い悩むような行動に出れば、友里が真っ先に一真にヘルプメールを送り、また一真は部員全員のお小遣いからトンでもない額をぼったくる。もう見え見えのパターンだ。

荻原は金髪の髪型をなるべく乱さないように後頭部あたりを人差し指で搔いた。そして、荻原は手をパンツ！と叩いた。

「よし！じゃあ、決起が終わったところで、突っ込むぞー！」  
「いきなりかよ！」

どこからとも無く、と言うより男子空手部全員に言われた。それもそうだ。まだチーム決めが終わってない。相当テンパッているのが分かった。女子全員はそのポケー人突っ込みそれ以外のコントを聞いて、肩をがっくりと落としていた。

しかしただ一人、全く無反応状態で体の形が変わらない奴がいた。  
(行くなら皆が良かったなあ・・・)

友里はそう思いながら、溜め息を吐いた。

「友里」

後ろから肩を叩かれて友里は後ろへ振り向いた。

そこには茶髪のストレートのショートヘアの御堂綾香みとうあやかが友里を引き寄せた。

「な、何よ・・・」

「何よじゃないでしょ？変だよ、傍から見ても。うじうじしちゃって」

「仕方が無いんでしょ！怖いんだもん」

友里と綾香は声を殺しながら話し合いを始めていた。綾香は険しい顔に、友里は必至に返すように綾香の険しいその顔に噛み付いた。

「そんな事言ったら、一真君に見切られちゃうよ？」

「・・・」

何故か友里の顔が真っ赤になった。結構友里の胸に来たようだ。

そして、綾香はそれにここぞとばかりに言葉の攻撃をぶつけて集中攻撃を仕掛けていく。

「分かってるよお。友里、一真君のこと、好きなんですよ」

トンでもない爆弾攻撃だ。原爆のリトルボーイ級の威力を持った言葉の攻撃が友里の胸に突き刺さった。

「ば、バカね！私、そんな事思ってるわけ無いでしょ！一真だつて・・・」

「一真だつて、なんて？」

「一真だつて・・・そんな事思つてないだろうし・・・」

友里の顔がみるみる内に赤くなつていく。友里の胸が強く締め付けられたような感触がした。なんだか、そんなこといって何だか胸が締め付けられるような感じがする。

どうしよう・・・もし、本当に一真がそんな事思つてたら・・・嫌われてたら・・・。

「友里？目が潤んでるよ？」

「へ？」

友里ははつと気づき、瞼を一指し指で拭いた。人差し指に湿つた、そして冷たい感触が触れた。 (涙・・・?)

はっ！として、友里はもう一方の目の瞼を拭いた。そこにも涙が・・・。

(私、こんなに・・・?)

友里は涙がついたその指を覆い隠すように手を握つた。友里は自分の気持ちに驚いた。一真に嫌われると考えるだけでこんなにダメージが来るなんて・・・。そりゃあ、幼稚園からずっと一緒にいる幼馴染だからって、こんなにもなるなんて・・・。

横では綾香がふうつと息を吐いた。もうこれ以上追求しないでおう。これ以上やったら本当にいじめになつてしまう。

「じゃあ、周り五人勝手にくめえ！それが今回のグループだあ！」

「ざつっつ！！！！！」

男子空手部全員に一気に突っ込まれる荻原もなかなか面白いものだった。漫才集団みたいな男子空手部と、おしとやかな女子空手部はこの後、トンでもない地獄絵図を見る羽目になつた。

しかし、このときはまだ全員知るわけが無かつた。

## STAGE 6

「だから一真！助けて！」

「いきなり、んだよ。朝ぐれえ静かにゲームさせてくれよ」

俺は友里にいきなりの依頼内容なんか聞いてちやいなかった。ていうか聞く気すらない。先週はせっかくエリーの仕事を手伝ってやってたつてのに、あいつなんて言ったか分かるか！？

お前なんか言うことは無い！

んにやる・・・自分はいくらでも知れるからって調子乗りやがって。俺の右前の席にいるエリーは相変わらず、本を読んでばかり。なんだか、冷たい空気が見える。あのときの戦いの時はせっかくかっこいいって思ったのに、今に至っては高飛車なじゃじゃ馬娘だ。昨日に至っては・・・。

ちよっと、この町を案内しなさい。

命令かよ。もう俺の事なんか奴隷レベルだな。最悪だ。俺がいつもフィニッシュするからやいてんのか？俺はゲームから目を離し、エリーの背中をにらんだ。しかし、それすらも物怖じないかのようには、エリーは全く動かない。たぶん、俺のこの鋭い視線には気づいているのだろう。

「一真！」

「うわっと！」

ここにもいた、じゃじゃ馬娘！つたく、俺の周りにまともな女は集まんないのかよ。困った体質だなあ・・・これは。危うくPMPを落としそうになった俺はPMPをあわててキャッチ、そして背筋を伸ばして友里のほうへ向いた。俺の目の前にいる友里は口に形を「へ」の形にして、俺を険しい目でにらんでいた。そして、じと目になって俺の顔に近づいた。いや、友里さん？マジでめっちゃ近いんですが？俺の心臓がとんでもなく速くて激しいビートを叩いた。何だか俺このごろポーカーフェイスでいられなくなってる気がする。

・・・

「また、えりちゃん見てたでしょお」

「はい？」

「何だか一真ずっとえりちゃんに見とれてばかり・・・」

「あ、あのな、友里。そんな悲観的にならなくても？」

「私よりもえりちゃんのほうがいいんだ」

もう泣きそうになってやがる。

「えりちゃんの頼みごとなら何でもOKなんだ・・・」

「んな訳ねえだろ！」

俺はガタツとゲーム放つたらかして、立ち上がって、友里に向かってほえた。

「俺は誰も好きになるわけでもねえし、好きになれる筋合いも無い！だいたい、俺はんな理由で依頼選んでるんじゃねえんだよ！勝手に悲観的になってんじゃねえぞ！」

俺はずいずいと友里のほうへ寄っていった。

「か、一真？近い・・・」

友里は顔を真っ赤にして、俺の顔を見上げていた。ん？そういえばこの態勢結構危ないな。俺はすぐに体勢をすくつと戻した。危ない危ないあんな至近距離に近寄つたら傍から見たら俺と友里の関係が疑われる・・・いや、疑われる内容なんかどこにも無いけどな？

「で、一真は受けるの？受けないの！」

「受けないって言ったら、お前俺を攻撃だろ？わあつたよ。しょうがねえなあ。依頼料はしっかりとるからな。わかつたな？」

「分かつたてば」

友里は口を尖がらせて、俺から目をそらせた。

さて、学校を俺たちは早引きをして、その現場に向かった。電車に一時間ぐらい乗って、山道を三十分歩いて、ようやく現場にたどり着いた。すげえな。確かに見た目は何か出そうな雰囲気だな。俺はその現場となった廃校の建物を見あげた後、俺は友里と逆方向

に目を向けた。

「なんで、お前もついてきた・・・エリー！」  
「なんで？なんでだよ！何でこいつまでも・・・。」

突然横入りすや否や、しかも俺と友里の間に割って入ってきて、  
こんなこと言い出しやがった。

「私も行きたい！私も連れてって！」

お前なあ・・・。ただでさえお前と俺の関係を勘ぐってきてる友里の目の前でそんな事言い出したら俺の立場が本当に危くなるぞ？どうすりゃあいいんだよ、俺は。ここで断るべきか？そう、ここは断るのが正解だ。もう関わるな、エリー。

「あんまし喋ったことの無い奴なんか連れて行けるか。場合を弁えろ、新人」

「そ、そんなあ」

エリーはぶうつと頬を膨らませて俺をにらんだ。なんだ？こいつ。また演技か？悪いが俺はその手には強いって自身があるんだよ。だから、そんなことして、俺を落とそうなんて思ってたんじゃないぞ。

「そんな顔したって連れて行かないもんは連れて行かない！だいたい、お前はこんなことするぐらいなら他にやることあるだろうが！それぐれえ早く分かれ！んな事も考えねえのかよ！」

「う・・・ぐ、ご、ごめんださい・・・」

目いっぱい涙を浮かべ、とうとう泣き落とすと来やがった。どこまでもしつこいなあ！俺はんな手に乗らねえからな。俺は次の手を考えた。さあ、どうやってこいつを引き剥がした物が・・・。

「一真！！！」

「ぐわっ!？」

横から友里のどかい怒声が俺の耳に飛び込んできた。耳イッテエ。友里のほうへ向くと、すごい形相で俺を睨んでいた。これはマジでまずいパターンだ。あんましあつてはいけないパターンだということ

とがすぐに分かった。

「一真言い過ぎ！えりちゃん可愛そうじゃない！そんな言うこともないでしょ！」

「お前なあ・・・こいつは関係ないだろ！一番の部外者だろうが！」

俺はエリーのほうへビシッと指を突き刺して、友里に噛み付いた。

「私は、一真の言い方があまりにも乱暴だつて言ってるのよ！相手は女の子よ！一真の言い方はあまりにも言い過ぎなの！」

「どこがだよ！お前にだつてあんぐらいきついだろ！俺は誰だからきつくするのは嫌なんだよ！」

「私とえりちゃんは関係ないでしょ！一緒にしないで！一真がえりちゃんをそんな風に言うんだつたらえりちゃんも連れていこ！じゃないと可愛そうでしょ」

と言うわけだが、なんだよ、この空気。友里と俺の会話はあった、俺とエリーの会話もあった。でもエリーと友里の会話なんか一切なかった。メチャクチャキグシヤクしてるな、この二人。すっげえやりづらい。俺はエリーのほうへ向いて、エリーの顔をうかがった。この幽霊校舎をエリーは不思議な物でも見ているかのような目ですつと見上げていた。そっか、こいつにはこういうのは初めてなんだな。案外知らないことのほうが多いのかも名。

「んじゃ、じっくりと観察と行きましようか」

俺は息を小さく吐いて先へ進んで、俺だけが歩いて、背後の二人は付いてこない。

「どうしたんだ？二人とも。行かないのか？」

「は、入るの？一真・・・」

友里は震えながら聞いてきた。

「は？」

マジでは？だよ。何分かりきつたこと聞いてんだか。あまりにも

非常識すぎる。

「つたりめえだろ？じゃなきゃここに来た意味ねえだろ？」

「そ、そうだけど……。一真ひとりで行って来て！」

「はあ？」

とつとう訳の分からんこと言い出した。俺は後頭部をがりがり搔いて、友里のほうへ目を細めて向いた。

「お前なあ、依頼してきたのはお前だろうが。依頼人が現場まで案内するんがふつうだろ？それか何か？怖いからか？」

「……………」

すっかり黙った。こいつ、やっぱり怖がつてんのか？

「お前なあ、ここは墓場でもなければましてや今は夜でもない。

この前幽霊が出てくるメカニック教えただろうが。それでも怖いのか？」

「で、でも見たんだもん！開かないドアのぞき窓の奥でキラリツて光る何かが！きつと山姥だよ！山姥が包丁研いでたんだよ！ここに住み着いてるんだよ！」

「バー口、んな訳ねえだろ。現代科学が纏わり付くこの世界で、お化けやら妖怪がいるわけがねえだろ」

まあ、向こう側の奴は何でかここにいるけど。実際俺達の目の前に……。俺はエリーの顔をうかがった。エリーは友里の顔を見上げて、その後俺のほうへ向いた。

「はあ、分かったよ。俺に引つ付いといてもいいから、しっかりお前が山姥を見たとか言う場所まで案内しろよ。それとエリー！」

「な、何？」

いきなり話を振られてエリーは本当にびっくりしているようだ。演技……。じゃないよな？

「お前も付いてきたんだ。お前も、俺の仕事手伝ってもらうからな！」

「分かってるって！」

今度は演技だな。明るさが異常だ。いつものエリーじゃないから

すぐ分かる。ま、いつもあんなエリーを見てたら俺は持たないし、何より友里はびっくりだ。意識が持っていかれるだろう。

「んじゃ、今度こそ本当のスタートだな」

友里は俺のすぐ背後に付き、エリーは俺から少し離れてすぐ後ろを付いてきた。

確かに、何かでそうなぐらい暗かった。もう夕方近くだからって言うこともあるが、窓には中が見えないように黒いフィルターが貼り付けられていた。外はあんな明るいのに、俺の時計に入ってるLED発行ライトを点けて足元を照らすなんて、なんだか変な感じだ。変な感じ……。

「お前らな……」

俺は横を見た。

「何で俺の腕にしがみつくだよ二人して」

「だ、だつてえ」

「こわいもん……」

友里は目を潤ませて、エリーは俺から目をそらせて口を尖らせてどっちも頬を赤くして言った。エリーは俺の左腕に、友里は俺の右腕にしがみ付かれてるせいで両腕共に自由が利かない。腕をブランブランにするとなんだか変なバランスになってしまうので、両腕共に俺のズボンのポケットに突っ込んでいた。

友里ならまだしもわかる。しかし、エリー、お前はもつと怖いもん知ってるだろ。お化け怖かったのかよ。お前それ演技じゃないよな？どう見ても。俺は左右の少女お二方を目に映らせた後大きく溜め息を吐いた。

なんだよ、この漫画みたいな展開は……。変なの。名探偵コナンにもシャーロック・ホームズでもこんな展開なかったぞ？

やっぱり似てるだけか。俺とその探偵たちは。俺は頭の中にかつて懂れていた探偵たちの顔を思い浮かべながら首をかしげた。

「あ、一真そこ！」

友里が俺の体越しにある一つの部屋の扉であろう鉄製の扉に指を指した。俺はその鉄製の扉に時計型LEDライトの明かりを当てた。まずはドアノブに明かりを当てるのが普通だ。左向けのレバー型のドアノブで、下にくの字型の鍵穴があるタイプだった。俺はそのドアの前に立ち、ドアノブに手を掛けた。

「あれ？」

動かない。ドアノブが回転しない。ガチャガチャと言う錆びたような音がして全く動かない。俺は全体重をドアノブに掛けたが、全く動かない。そういえば鍵あけないとドアノブが動かないとか言うタイプもあるって聞いたな。これはそういうタイプなのか？じゃあ、今日は無理っばいな。

「鍵開けないと回らないタイプかな」

「た、ぶん」

友里は躊躇いがちに頷き友里もドアノブに触れた。しかし、それから先のことはしない。すぐに手を離して俺の腕にしがみついていた。いや、もうそのまま離れてくれよ。

俺は後頭部を掻きたいが、両腕共に拘束されている状態で、全く自由が利かない。俺は後頭部を掻く代わりに、肩を落とし溜め息を吐いた。

「一真、どう？開ける？」

「今日は無理だな。今日ピッキングツール持ってきてないしな。ここに入るのは明日だ。だから俺は明日学校休む。友里、お前は学校休む必須だが、エリー、お前は どうする？怖い山姥だったら俺でもお前を守りきれぬのか保障できないぞ？」

「わ、私は・・・」

エリーは自分の左腕を見つめた。たぶん、自分のPLDを見ているのだろう。ここで俺を見過ごすか、はたまた俺を監視し続けるために付いて来るか・・・か。本能に動いてくれたほうが俺にとってありがたいんだが・・・。さあ、どうする？エリー。

「私も付いていく！一真と友里二人だけに行かせたくない！」

「……………」

「……………」

おいおい、それじゃあ俺と友里の関係を疑ってるような感じの言い方だぞ？それどころか自分は桐ヶ谷一真に気がありますとか言うことをほのめかすような発言だな。演技にしてもやりすぎだろ！それは。

「一真……………」

「……………」

どうしよう。上目遣いで答えてくる友里のアイコンタクトで聞いてくる質問に答えられない。ここはOKするか？いや、そんなことしたら友里にまた叩かれるし、断った場合は帰ったら俺はエリーとマジバトル勃発だ。その事態だけは避けねばならない。どっちが俺で何とかなるかといわれたら……………」

「わあつたよ。しょうがねえな。どんな精神の持ち主なのか分からねえけど。言ったからには来いよな」

「分かってるって」

エリーは手をひらひらと手を振り心配するな無問題キマンタイとか言う態度をとった。って言うか、お前俺の家に居候状態なんだよな。たぶん、付いて来るだろうなとは思っけど……………。

「んじゃあ、明日だから……………」

俺は今も尚俺の腕にしがみつく少女二人を交互に目を配らせ、溜め息を吐いた。

「いい加減お前ら俺から離れる！」

廊下に俺の大声が響いた。

## STAGE 7

俺は両者二人にしがみつかれながらも、外に出てきた。外に出るや否や友里とエリーは俺からパツと離れた。ようやく拘束から解かれた両腕を、肩を支点にちよつと回してみた。一回転する間に凄間接の音がした。相当負担がかかってたんだな。俺はふうつと息を吐き、肩の力を抜いた。歩きづらかった……。俺は片方の肩をがっくり落とし溜め息。このごろ溜め息多いなあ、俺。

俺が目を開けて、前を見てみるとまっすぐの山道の方から工事現場で働いてそうなパツと人数十五人ぐらいの人達がこちらの方へ歩いてきた。俺が気づいてから数秒した後で、俺の両端にいる彼女達も気づいたそう。友里はその男達を伺うようにただただ見続け、エリーは俺の表情を伺ってから目の前の男達を目をぱちくりさせながら見ていた。

向こうたちもこちらの存在に気づいたようで、その中に責任者らしき男が先頭になっペースを変えずにこちらに近づいてきた。

「どうした？ 兄ちゃん、女の子二人連れて」

「連れてきたんじゃないやありません。連れてこられたんです。悪く言えば拉致されました」

「ちよ、一真！」

友里が必死になって怒る。そんなに叫ぶか？ 耳が痛いんだが？ 今日だけで耳のダメージが半端じゃない。俺は耳を塞ぐように、指を突っ込んだ。

「変なこと吹き込まないで！」

「そうよ！」

エリーまで便乗だ。四面楚歌だな、俺は。俺は顔を引きつらせて、エリーからも友里からも視線を外した。目の前にいる口ひげを生やしているお頭とおもわれる風格をしている五十歳前後の人は「ガツハツハ」ともう大笑い。何が面白いんだ？ 熊が大笑いしているよう

で変な違和感だ。人間だよな？この人。

俺は気を取り直して、その人に向き直った。

「で、何でそんな大勢でこんな廃校舎に来たんですか？」

「ああ、つい最近取り壊しが決まってなあ。何でもここいらで山姥を見たとか言う証言が出てきて、周りの住民はもう不気味がつてな？そいでこの町の町長様が、この廃校舎を取り壊してちよつとでも気をやわらげさせてくれって頼んできてなあ。まあ、んなことすりゃあ余計山姥の怒りが爆発するんだろうけどなあ。こっちは仕事でやってっから、しょうがねえな」

「山姥・・・」

俺がその単語を呟くと、後ろ少女二方がまた俺にしがみつく。あの、暑いんですが？

「や、やっぱり山姥がいるんだよう・・・。一真あ」

「・・・」

「お前らなあ」

俺は呆れたような表情を浮かべ、無理やり二人を俺から引き剥がした。暑いんだよ、ホントに。

「山姥ねえ・・・」

俺は顎に手を当てて、考え込んだ。いつの間にやら俺は笑みをこぼしていた。

「悪い、エリー、友里。やっぱり俺ここに残るわ、今日」

「へ？」

「へ？」

二人して同じ発言、同じ反応だ。ま、当然か。

「今日の夜その山姥さんに会いに行く」

「か、一真。止めとこうよ。そんなことしたら一真が・・・」

「俺が殺されるってか？バ一口、んなもんがあるわけねえだろ。」

俺をやれるもんならやってみるってんだ。山姥なんかいるわけがねえしな。相手は人間だ。人間なら、俺でも何とかできる。んで、お前らは、今日帰るのか？選ぶのはお前らだ。そこの少女お二方」

いきなり質問された俺の目の前にいる少女お二方は反応が遅れた。当然だともうけど……。 (気づけば後ろの集団完全無視のコントが発生していた)。

「そ、それは……。ねえ、えりちゃん」

「う、うん……」

友里とエリーはお互い目配せをしてから答えた。

ああ、何であんな聞き方したんだろう……。俺は今頃後悔していた。近くの旅館に泊めてもらったし、母さんに荷物を届けてもらえた。余分な者もな……。

「ああ、楽しかったね！えりちゃん」

「うん！」

お前らなあ……。さつきまで結構怖がってたじゃねえか。風呂入ったらもうそんな気分はどっかに行ったのかよ。しかもおまけつきだ。

「でも、びっくりしたあ、綾香まで来てたなんてね」

友里がふすまを開けるとエリーとあと一人、御堂財閥ご令嬢、御堂綾香（ごとうあやか）がいた。つかなんだよ。俺達は学校明日パスする気でここに泊まってたぞ？お前は関係ねえだろ。俺は心の中で毒づきながら苦笑いを浮かべた。

「まあ、この前私達が山姥見たじゃない？それが本当に山姥なのか確かめたくなちゃってね。でも、友里は絶対パスするでしょ？他の子も誘ったけど、怖いって言って、付いてこないし、じゃあなんだから一人で行こうってね」

「そ、そうなんだ」

友里は苦笑いを浮かべながら頷いた。

「でも、友里もよく来てたねえ。何で？」

「そ、それは……」

と、俺に目配せしてきた。おいおい、そのまま行くと俺のせいに

なっちまうぞ？何してくれてんだよ。綾香がすっごいじと目で俺を見てきた。あらら、完全に俺に全振りしやがった。よりによってエリーも俺のほうへ見る。これぞまさに四面楚歌。桐ヶ谷一真、最大のピンチ！

「はあ」

俺は大きく溜め息を吐き、目の前にいる三人の少女達に視線を向け、じと目で見つめた。

「友里、あの廃校舎行かないのか？もうそろそろ行きたいんだけど・・・」

「へ？もうちょっと待って。まだ心の準備が・・・」

「悪い、もうロスなしだ。さっさと着替えて仕度しろ。俺はもう用意できてんだ」

「そ、そんなあ・・・」

友里がわがまま言う子供みたいに地団駄を踏んだ。お前ってホントに子供っぽいな。俺はつくづく友里を見るたびにそう思う。エリーはそんな行動している友里を見て、目をぱちくりさせて完全な無表情。多分どんなリアクションすればいいのか分からないんだろうな。こんな時に。

「でも、一真。一真ってピッキングとかできるの？」

エリーがやつと俺に口を開いた。

「ああ。いまどきはピッキングされないような作り方してる鍵穴が増えてきているからあんまり活躍することないけど、ああいう古いタイプの建物は大体「く」の字型の鍵穴だから、何とかなる」

「そうなんだ・・・」

エリーは苦笑いを浮かべながら、はははと笑った。きっと根底ではそんなこと覚えてる暇があったら他の事やっつけとか突っ込んでるんだろうなあ。

「んま、とにかく。早く行くぞ。じゃないと、寝る時間が減るぞ？」

「はあい!」

手を挙げてよい返事ができたのは綾香だけ。エリーと友里は全く反応しない。間に挟まれていた綾香は左右を見て、二人の手首を掴んだ。

「はあい！」

そして、手を無理やり挙げさせた。友里とエリーはもう苦笑い。俺も苦笑い。お前なあ、幼稚園児か？俺達は遠足に来たわけじゃないんだが？

俺は顔を素に戻し、部屋を出た。そりゃあ、こいつらの着替えなんか見たくもないからな。エリーと友里に殺される……。

さて、真夜中の山中に入った俺達はまたあの廃校舎に向かっていった。もちろんさつきまで浴衣姿だった後ろ三人衆にはいつもの普段着に戻っていただいた。俺達は俺の時計のLEDライトの明かりを頼りにひたすら前に進んでいた。今回は準備万端。髪留めのヘアピンで即席のピッキングツールを作り、万が一このLEDライトが切れたときのために、ペン型懐中電灯も持ってきた。

しばらく歩くと、ようやく例の廃校舎にたどり着いた。後ろを振り向いてみると、綾香はただ見上げているだけで、友里とエリーはぶるぶる震えて身を縮ませていた。

「か、一真？」

「なんだ？」

「また……しがみついてもいい？」

「ヤダ」

やなこった。動きづらくてしょうがない。だいたい、何もでねえのに何でそんなことに無駄なエネルギーを使わなければいけないのだ？お前はその現場をじっくり観察するためにエネルギーは保存しとけ。全く……。

「か、一真、私は……」

エリーは手を小さく挙げて話してきたが、俺がその途中で言葉を

割り込ませた。

「お前もだめ」

「何も言っていないじゃん」

口を尖がらせて反論してきやがった。いや、この乗りだとお前が聞きたいことは大体予測できんだよ。って言うか、分かっているだろ？ちよつとでも希望を持って聞いたんだろ？それでも駄目だ。

「何も言っていないでも分かるよ。この乗りだと、『私はしがみついてもいい？』とか聞くこうと思ったんだろ？悪いが誰も無理だ。って言うかヤダ」

きつぱりと断った。シンプルすぎてむしろ自分で言ってる憎くない。

「意地わる・・・」

エリーは俯き気味で、呟いた。ん？なんかスイッチ入れたか？俺

「意地悪いじわるイジワル！一真の馬鹿バカばかあ！」

「はあ？俺なんか怒らすようなことしたか？」

「した！幽霊嫌いの女の子に『しがみつかせて』って言われたら『いいよ』って言うのが普通なの！それを一真は・・・一真の馬鹿あ！」

「はあ？お前らがしがみついたら俺が動きにくいつつてんだよ！しがみつくな！普通に歩け！分かったなお化け嫌いお二方！」

俺はエリーと友里に指を刺し忠告した。全く世話の焼ける連中だ。やっぱ無理やり帰らすのが正解だったかなあ。困った、非常に困った。俺は溜め息を吐いた。

「お前ら、あの堂々とした御堂財閥のご令嬢様を見ている。全然怖がっていないだろ。お前らもあれ位度胸大きくなれ。分かったな」

「桐ヶ谷君・・・」

突然横から綾香が入ってきた。

「なんだ？」

「先頭行つてくれないかなあ。私怖くて・・・」

へへへとか言いながら照れ隠しのような仕草をした。

「……………」

あああ。これで俺は四面楚歌状態だな。ホントのホントに。

と言うわけで結局は俺一人だ。ま、こういう所はかなり慣れてるから大丈夫なんだが、不気味なのは変わらないな。確かに、ここに友里やエリーがいれば俺の耳は多分難聴の障害を負うだろう。全くじゃあ泊まるなよ、あの旅館に。つつうか帰れよ。俺は心の中であの三人衆を毒づきながら、なんだかんだと言って、あの開かずの間の扉の前に着いた。

「おし」

俺は時計型ライトを口にくわえ、ポケットからピッキングツールを取り出した。そして、口にくわえたライトで鍵穴を照らした。はじめるか。

俺はピッキングツールを鍵穴に差込み角度を変えたり、引き戻したりして、どんどん鍵穴の奥のほうへ入っていった。

すると、ガタンと言う音が聞こえた。たぶん、鍵が開いた音だろう。俺はピッキングツールを外し、レバー型のドアノブをまわした。

(ん？案外すんなり回ったな)

俺はドアノブを回し、ドアを押し開けた。

そして……。

「遅いねえ、一真」

「うん」

友里とエリーは校門際の壁にもたれかかって一真を待ち続けた。校舎に入ってからまだ十五分ぐらいしか経っていないのになんだかそれが一時間であるかのように感じる。友里もエリーも綾香も暇でしようがない。一真を一人で行かせるのが正解だったのか？

そんな考えが三人の頭の中には浮かんでいた。

ぼーっとしてると、突然友里の携帯がピリリリリと言う着信音を鳴らした。一瞬ビクツとしたが、友里はすぐにポケットから携帯を取り出した。

「一真……」

「へ？」

エリーは背伸びして友里の携帯を覗き込んだ。そこには確かに「桐ヶ谷一真」という名前が表示されていた。

（へえ、これが現実側リアルの通信端末なんだ……）

エリーは背伸びに疲れたのか、かかとを地面につけた。

「も、もしもし、一真？」

友里は恐る恐る電話を耳に当てた。

『友里！今すぐ警察呼べ！』

「へ？何、一真？」

電話の向こうにいる一真は声からして相当あせって興奮している。こんなこと珍しい。

『人が死んでる！早く呼べ！殺人だ！』

「さ、殺人！？」

友里のパツと目を開いた。友里のその声に反応してエリーも綾香もパツと友里のほうへ振り向いた。

「う、うん分かった。警察呼んどくから、私達は……」

『そこにいとけ！警部たちが来たら開かずの間までしっかり案内しろよ、分かったな！』

「うん！」

それを最後に通話が切れた。横から綾香が友里の表情を覗き込むように聞いてきた。

「ねえ、殺人って？」

「うん……。とりあえず警察呼んどこ」

友里はすぐさま三桁の数字をダイヤルした

俺はライトで目の前にいる死体を照らした。

（包丁で心臓一突きか。こりゃあ、ほぼ即死だな）

死体の男は年齢四十歳後半の男で、頬がげっそりと痩せこけている。黒いTシャツにジーパンという貧相な服。仏の顔は目を見開き、口を大きく開けていた。ま、探偵ものの漫画でよく見る死体だな。俺は死体に近づき、肌に触れた。

（死後硬直から三日ぐらいか……。三日前って言ったたら、友里達が肝試しして、山姥を見たとか言う日だな）

俺は口元を覆い隠すように顎に手を当てた。何か、何かないのか？手がかりが……。

俺が考えをめぐらせると、その男の人の手の中を見た。鍵だ。しかも、くの字型の鍵穴を空ける奴だ。      面倒くさいなあ・

……。これだと、密室殺人じゃねえか……。俺は苦笑いを浮かべ、ふうつと息を吐いた。そうだとしたら、優先的に調べなくてはいけないのはどうやって密室を作ったのか……。か。でも、それは今できない。俺が死体に過度に触れてしまうと、俺まで容疑者にされてしまう。ましてや指紋が残りやすい金属でできた鍵を触ったりでもしたら、お前が犯人だと言われても何も言い返せない。

だから、極端に死体に触れず、そして、分かる範囲を調べる。それだけでも分かることがあるかもしれない。

（窓はあっても脱出できないよなあ）

俺は窓があるほうへライトを照らした。ここは三階だ。もし、誰かがこの人を殺して、あの窓を脱出すれば、きっとその外に犯人の死体があるはずだ。だが、そうであれば俺たちは校門から見えたはずだ。ライトを照らして、校舎を満遍なく照らして、死体が転がっていないかった、と言う時点でこの窓から脱出したことはまず無い。へっばこな捜査官が調べれば、「自殺だあ！」とか叫びそうだが、そんなことすれば仏さんが怒ること間違いなしだ。

だから、まずは厳密な捜査から始めよう。しかしなあ……。死体に一切触れられなかったらどうしようもない。

「一真！警察の人たち連れてきたよ！」

友里が廊下のほうから警察のほとたちを連れてきた。おお、お前お化け嫌い無くなったのか？エリーもまたその後ろを付いてきていた。これでお前達二人は見事克服だな。しかもつれてきたのは宇佐美淳二みじゆんじ警視庁捜査第一課警部だった。本当に人選いいなあ、警視庁さっすが、俺がいつもお世話になってる人たちだけある。いや、お世話になってるのは警視庁か……。

警部は俺を見るや否や溜め息を吐いた。おいおい、警部。俺がいたら何か悪いことでもあるのか？

「まさか君が来てたなんてね、桐ヶ谷君」

「まあ、今回は出会ってしまったものですから。いつものように俺に依頼料を取られるよりましでしょ？」

「まあ、そうだね」

警部は肩をすくめ、死体に目を写した。

「死体には触ったのかい？」

「もちろん、触ってなんかいませんよ。現場保存は捜査の基本ですから」

「わかつてるじゃん。さすが高校生探偵、桐ヶ谷一真だね」

「茶化すと、今度から依頼料を倍にしますよ」

俺はシュパツと警部の茶化しを横切りするようにいった。警部は苦笑いを浮かべて死体に近づいた。

「どうだい？鑑識さん」

「死後経過時間は約七十二時間。凶器と思われる包丁で心臓一突き、ほぼ即死だな」

この鑑識さん、警部のため口なんて凄い凶太い人だな。俺は非難するわけではなかった。すげえかつこいいな、この鑑識さん。名前聞いとこつと。ハードボイルドとか謳いそうだな見た目は。

「で、一真君はどう見たんだい？何もしてなかったわけでもないだろ？」

「ええ、確実に言い切れるのは密室殺人だということ。その人の

手に鍵が握られている状況ではそれが絶対確定でしょう。心臓一突きできたということは、争ったという可能性は極薄です。争ったのなら、他のどこかに擦り傷や何やらの傷跡があるはずです。しかし、パツと見そんな物は無い。つまりほぼ無抵抗で心臓を刺されたということになります。っていうか、気づいて聞いたでしょ、警部」

「まあ、うすうすは・・・ね。でも、人間もう一人ぐらい同じ意見の人がいないと不安でね」

「そうですか。そういえば、友里から聞いたんですけど、この教室に山姥が現れたらしいんです」

俺は警部の愚痴が延々と続く前に話を戻そうとした。

「山姥？」

警部は伺うような表情になり、俺を見てきた。そうだよなあ。迷信的なものを信じない俺がいきなりそんな事言い出したらびっくりするわな。

「ま、それに見えた何かでしょうね」

「それだと、犯人だと間違いないんじゃないかな？」

「いまは・・・そう思っときましよう」

俺は呟くように言った。そう、今は断定できない。その山姥の正体を探る必要がある。まいったなあ。これじゃあ迷信を追うようなものだ。俺は後頭部を掻きながら、苦虫を殺したような表情を浮かべた。

「ねえ、一真」

エリーが俺の後ろから服を引っ張ってきた。

「ん？」

「奥にもう一つ部屋があるけど調べたの？」

「調べてない」

俺はエリーが指すドアのほうへ顔を向けた。現色のアルミ質のドア。多分、コーラス室だろうか？俺はそのドアに近づき、「く」の字型の鍵穴と知るや否や、ピッキングツールを使ってドアを開けてみた。

ガチャっと言う鍵が開く音に、考え込んでいた警部が反応し、こっちに振り向いた。やべ、まだ俺、ピッキングなんか警部に見せたこと無かった……。

警部が俺の方へ歩いてきた。あああ。ばれちゃった。怒られるぞお？

俺は溜め息を吐きながら肩をすくめた。

「桐ヶ谷君……」

「何ですか？警部」

「犯罪だよな。それ」

「そうですねが？」

しようがない。潔く認めるしかない。

「ピッキングってホントはいけないう事知ってる？」

「知ってますよ。でも、実際捜査に役立つてますから。私的に使うことは無いですからご心配なく」

俺は棒読みのように言つて、淡々と言うことを言い切った。

「そうかい。じゃ、僕は君を信じようかな？」

「そうですね」

アブねえ……。相手が宇佐美警部でよかった。すぐに信じてくれた。……いや、ホントこれからはもう私的に使おうとしないかな？

「じゃ、空けてみるか」

俺はドアノブをまわし、ドアを押した。

「あれ……？」

開かない……。何かで奥で押さえられているようだ。

「警部」

俺が警部を呼ぶだけで、警部は頷き、俺の考えを察してくれた。

「行きますよ」

「うん」

警部と俺はその開かないドアに向かって体当たりした。ダンッダッという大きな音が立て続けに現場の部屋中に響き渡る。周りの

視線何か気にしてたまるか。気にしてらんない。

少し開いたところで、俺と警部は体当たりをやめ、距離をとった。

「せーので行きますよ」

「分かってるよ」

「せーの・・・！」

俺と警部は軸足を踏み込み、いつせいにバツクキックでドアをぶち破った。バタンツ！と言うドアがぶち破られる大きな音と、ガラッ！と何か崩れる音がしたと思ったら、あっけなくドアの留め金が壊れて勢いよくドアが開いた。

そこにはピアノが一台と椅子が積み重ねられているだけと言うなんとも簡素な場所だった。このドアを塞いでいたのは、その積み重ねていた椅子だった。どうやら何者かがここにある積み重ねていた椅子でこのドアを塞いでいたようだ。

でも、何でだ？

俺は少々考え込み、頭の中で整理した。可能性としてあり得るのは・・・。

「いや、でも・・・」

俺は首をかしげた。それならば、どうやって・・・。

「一真？」

友里が覗き込むように横から俺の顔を見てきた。しかし、俺はその声に気づかなかった。なにせ、考えに完全にふけた俺は聴覚の機能は完全にカットして、その分を思考力に当てているからな。たぶん・・・。俺はコーラス室から出て、被害者の死体に近づいた。そして、屈みこみじっくりと死体を観察。

「ん？」

何だ？これ。俺は被害者が鍵を握っていたほうの手の中指と薬指の間にある小さな切り傷を見つけた。

「もしかしたら・・・」

俺は呟き、再びコーラス室へ駆け出した。そして、広くて簡素なコーラス室にライトを全体に照らして、見回した。

向こうのほうにまたドアがあった。俺は駆け足でそのドアのほうへ向かった。今思えば何でナイフで刺殺されていたのに、一滴も血痕が床に無かったのだろうか。確かに、心臓をすっかり突きすれば大量の出血は避けられる。しかし、倒れたときに、いくらかわずかの血痕は飛び散るはずだ。しかし、あの部屋にいる被害者の男の周りには全く無かった。

そう、俺は見つけた。コーラス室の中にわずかな小さな血痕を。俺はそれにライトを照らし、しばらくそれを眺めた後、そのまま向こうにあるドアに向かつて歩き出した。

そのドアはどうやらこちら側からかけるタイプの鍵らしい。俺はその鍵を回し、ドアノブに手をかけてそれを回し、ドアを開けた。そこには非常階段があり、それが下の階まで続いていた。

(なんだ、簡単なトリックだったのか)

しかし、なんでいちいちコーラス室のドアの前に椅子を積み上げ、鍵を開けてもドアを開けられなかったのだろうか？俺は顎に手を当て、考え込んだ。

「桐ヶ谷君」

警部が俺の名前を呼び、俺の肩を叩いた。俺はその叩かれる感覚に気づき警部のほうへ振り向いた。

「今日はもう遅いから、続きは明日にしよう。見張りを五人ぐらい付けとくから、君は早く宿に帰ってゆっくり寝なさい」

「.....」

そっか、今思えばもう午前一時を過ぎている。確かに起きるには遅い時間だ。しかも周囲は暗く、視界が悪い。これでは、些細な証拠を見つけることができない。

「そうですね、そうさせていただきます」

俺は頭を下げて、コーラス室を後にしようとした。

「桐ヶ谷君」

また後ろから、俺を呼ぶ警部の声が聞こえた。

「何でしょう？」

「友里君や、綾香君たちを守って上げなよ。そうじゃないと、君に截拳道を教えた意味がないからね」

「……………」

俺はその言葉をきき、口元で笑った。そうだよな。俺がこの格闘技を覚えた理由がそれだもんな。

「分かりましたよ。俺をまともに格闘技で勝てるのは、警部しか知りませんから。大丈夫ですよ」

「そうかい。それは良かったよ」

俺は笑みを浮かべながらそのまま現場を後にした。

## STAGE 8

「一真……一真！」

俺の体が果敢にゆすられる。俺はその感覚を感じながら、俺は目を覚ました。そのゆすってきた手のほうへ、頑張つて首をひねつてみた。友里がなんだか目尻を下げたような表情で俺の顔を覗き込んでいた。俺は息を吐き、そのまままた眠りに入ろうとした。

「うう……一真！朝だよ！」

また激しくゆすつてきた。俺はうつとうしさを抑えたような表情で友里に方へ目を向けた。

「んだよ……まだ七時時だぞ？今日は学校サボつただろうが。じゃあ、とことんサボる態度をとる」

俺はそういい捨てて、また眠りに入ろうとした。これじゃあ、友里がいらいらする一方だな。証拠に「うう……」と言う友里の唸り声が聞こえる。そんな唸り声挙げんなよ。アニメか……。

「一真の……一真の……」

「意地悪か？」

「へ？」

「いちいちうるせえな……。俺昨日何時に寝たと思う？」

「何のこと？」

友里が疑問の顔を浮かべた。俺はその言葉すら聞かないまま、目を閉じた。

「……？」

友里は首をかしげた。どういいう意味が分からない。

俺が何時に寝たと思う？

友里は一真が吐いたそんな意味深発言を考え込んでいた。結局は何も浮かばずじまいだが……。

「どういう意味？一真」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全く返事しない。寝息を立てて完全に爆睡している。また体をゆすって起こしてやるうかと思っただときだった。ガラツと襖が開く音がしたと思っただら、そこにはスーツ姿の宇佐美淳二警部がいた。結構遅くまでおきてたのだろうか、目元にホントに薄っすらと隈ができていた。

「止めといてあげないかな？彼、結構疲れているみたいだし」

宇佐美は欠伸交じりに言った。本当にあんまり寝てないようだ。

「どういう意味ですか？」

率直な質問だった。何にも遠回りせず聞いてくるから、宇佐美にとつては答えやすかった。

「彼、犯人が出没しまいかとずっと起きて君たちを見張っていたんだよ。朝早くまでね」

「へ、一真が？」

「意外かい？」

意外だった。一真がそんなことをしていたなんて……。そういえばいつも日越して事件を解決できなかったりしたときの一真は寝起きが非常に悪い上、昼近くまで寝ることがよくあった。

「宇佐美警部、それっていつもなんですか？」

「どういう意味かい？」

宇佐美が顎に手を当てながら何うように聞いてきた。まさかの逆質問に友里は言葉に迷い、言葉を探した。

「えっと……日越して事件が解決しなかったときで、私が付いてきた時っていつも朝早くまで起きてそんなことしてるんですか？」

「そうだよ？それがどうしたんだい？」

「いえ……何でもありません」

友里は俯いて、今も尚爆睡中の一真のほうを向いた。一真は友里からそつぽを向くように寝転び、呼吸をすることに体が小さく上下している。

友里は静かに立ち上がり、一真の顔のほうへ歩いていった。無防備の一真の寝顔はなんだか猫みたいな顔でかわいく感じてしまう。友里はいつの間にも頬が緩み、微笑んで一真の顔を見つめていた。

（そんなに心配しなくてもいいのに）

友里は手を一真の寝顔に近づけた。

（この、探偵キロ気取りのお馬鹿さん）

友里はつんと一真の鼻先をつついた。一真の顔はその感触に一瞬しかめたが、すぐに元に戻り、また静かな寝息を立てた。

ずいぶん寝た物だ。起きた時間がこんにちわの時間だ。俺はぼさぼさになった髪形を少し戻し、すぐに昼の日差しを浴びた。・・・変な感じ・・・。それが俺の率直な感触だった。普通朝日を浴びて、清々しくなるのに昼のを浴びてもそんな気分になる。結局、結論として日の光なんて同じだということだ。

「やっと起きたかい？桐ヶ谷君」

俺の横十メートルぐらいから警部の声が聞こえた。

「ええ、途中で邪魔が入ってましたが」

「友里君のことかい？」

「そうですよ。何で警部が守ってくれなかったんですか？」

「僕だつて寝て起きたところに友里君が君の睡眠を妨げようとしたところを発見したもんだからね。その時に気づいたんだ」

「・・・・・・・・」

俺はわざと不機嫌そうな態度をとり、後頭部を掻いた。

「そんな不機嫌にならなくても・・・」

警部は苦笑いを浮かべて俺をなだめようとした。その後警部は咳払いをして真剣な顔つきになった。

「桐ヶ谷君」

「何でしょう」

俺は伊達眼鏡をかけて警部の顔を見た。

「どうやら、君が寝ている間に容疑者が絞れたらしい」

「そうですか」

「うん。被害者の名前は戸坂道哉としかみちぢ。フリーターで、このごろはほとんど職場に出ておらず、人との交流はここしばらくないそうだ」

「属に言つとひつきーですね」

「まあそうだけど・・・」

「警部も定年を迎えればいずれはそうなるでしょう」

「そんな事いわないでくれよ・・・。将来が怖くなる」

警部は苦笑いを浮かべてまた手帳に眼を落とした。しかし、そこは大人。友里やエリーみたいに爆発なんかしない。しかし、結構精神にダメージがあつたみたいだ。大丈夫か？警部。

警部はすぐに真顔に戻り俺の顔を見てきた。

「つづき。彼が殺されるような動機があつて、関係のある人物を探つてみたら三人出てきたんだ」

「三人ですか。かなり絞れましたね。さすが、警視庁。やることが違う。俺の捜査についてくるだけありますね」

「棒読みで言われても何も嬉しくもなるともないよ」

「そうですか。ならば感情を込めて言つた方が良かったですか？」

「気持ち悪い画しか出ないからやめてくれ」

毒を持って毒を制すだ。俺の毒舌を見事に横殴りしやがった。つて言うより、ぶつた切られた。やられた俺からしたらあんまり面白くない。

「つづき」

警部はそう呟くとその容疑者を言つていった。

「一人目は道衣登紀子みちいとうきこさん。三十七歳。彼女は戸坂さんが住むアパートの大家さんだよ」

「へえ、じゃあその戸坂さんが家賃滞納して請求しに言つたら何かされたんですか？」

「僕何も言つてないよ？何で分かつたの？」

「勘です」

すごいな俺の勘。一発だよ。何か降りてるな今日の俺。

「でも何かは分からないだろう？」

「暴行かなんかでしょう？」

「当たり前・・・」

また一発だ。っていうよりなんかドラマで良くあるパターンだな。これじゃあ出来たって何も嬉しくもなんともない。

「じゃあ、次の人。名前は藤原末春<sup>ふじわらすえはる</sup>。会社員。三十二歳。その人も道衣さんのアパートに住んでいる」

「その人も暴行まがいですか？」

「ちがうよ？」

ありや。いきなり外れた。俺の勘が神がかったのは一瞬だけだったな。

「彼の動機は、不倫を見られたかららしい」

「不倫？」

何だかアダルトイナ動機だな。やるほうが悪いのに。俺は呆れたような表情を浮かべ小さく溜め息を吐いた。

「で、それだけで殺したと？その人が」

「いや、それだけじゃないよ。それをネタにして、彼から金を巻き上げていたらしい」

「そうですか。ま、さしずめ金渡さなかったら不倫のことをネットに流すとか脅したんでしよう」

「その通りだよ」

「じゃあ、殺す動機にはなりますね。憎みますし、何より口をふさぎたくなるだろうし」

「そうだね。それは言ってるね。じゃあ、次最後」

「・・・」

俺は手帳に目を落とす警部を静かに見た。

「斉藤昇<sup>さいとうのぼる</sup>二十八歳。彼と同じフリーターで、同じ職場に働いていたらしい。けど、被害者が職場に出なくなっただけからは、彼が儲けたお金の六割も巻き上げられて、生活が苦しかったらしい」

「六割もですか。常識の範疇を超えていますね。それでよく生活が苦しいで済みますね」

「うん。そこは大家さんが見過ごしてあげていたらしい。家賃は無料だったんだって」

「ふうん」

俺は頷いて警部から目をそらせた。なんだ、どれも金が関わったのか。本当にドラマや漫画でよくあるパターンだな。っていうか被害者、どんだけ滅茶苦茶なんだよ。これじゃあ、殺されても文句なんか言えねえぞ。俺は空を眺めて苦笑いを浮かべた。

「で、全部言ったがどうする？桐ヶ谷君」

「まずは、俺もその容疑者に合う必要があります。連れて行ってください」

「分かった」

警部は俺の何を察したのか、すんなり認めてくれた。しゃべんなくても分かる。これこそが師弟の絆だな。俺はその絆とやらに感嘆できた。ん？そういえば……。

「友里たちはどうしたんですか？」

「彼女たちなら現場に直行したよ。一真が寝てる間に私たちで出来ることはしようつてね。愛されてるね君は。彼女たちが頑張ってくれてるんだつたら、僕たちも頑張らなきゃね」

「あいつら、余計なことしやがって」

俺は溜め息を吐いて、口元で笑った。じゃあ、俺は俺しか出来ないことをしようか。

と言うわけなんで、今俺は警部と道衣さんのお宅に邪魔させてもらった。小太りのおばさんで、動物でたとえるのなら、肥ったジャイアントパンダだな。とかなんとか、そんなギャグにもならない没作品を心の中で暗唱しながら、その道衣さんの話を伺っていた。

「で、道衣さん。あなたは戸坂さんが殺された日、どこで何をし

ていましたか？思い出せる範囲で結構です」

俺から話を切り上げた。道衣さんは俯き加減でこう答えた。

「私はその時間、また戸坂さんのお宅に伺って家賃を取り込みに行っていました。いつもは部屋にいるんで、戸坂さんは最後にして、その他の人のを取り立てて、その後で戸坂さんの部屋に伺ったんです。しかし、部屋には誰もいなくて、その時は変だとは思ってたんですけど、まさかそんなことになっていたなんて・・・」

「そうですね。ええと・・・戸坂さんの部屋を伺った時間は覚えてますか？」

「ええつと確か、お買い物から帰ってきた時間が大体六時ぐらい。近所の人たちとお話して帰ってきたのが大体七時半ぐらい。だから、戸坂さんの部屋に伺ったのは八時ぐらいだと思います」

「その後はどうしていました？」

「部屋に戻ってテレビでも見てました」

「このアパートには風呂は無いようですね。いつも入浴する際、どこかの銭湯に行ってるんですか？このアパートの住人の環境も分ければ幸いです」

「ええ、たぶんそうだと思います。この辺り近くに銭湯は二つしかありませんから」

「この辺りの地図とかありますか？場所を知りたいんですが」

「ええ、構いませんけど。ちょっとお待ちください」

道衣さんは立ち上がりタンスの方へ向かった。俺は前のちゃぶ台にひじを突き、ふうと息を吐きながら両手の五指を交差させた。やっぱ暇だなあ。待つ間は。

「すいません、待たせちゃって」

道衣さんは紙を手にしてちゃぶ台越しに俺達の目の前に座り、その用紙を広げた。そこにはこのアパートを含む、尾崎町おびきちやうの地図があった。

「ちょうどこの辺りがここで・・・」

と道衣さんはその場所を指差した。俺と警部はその指先に注目す

る。

「ここから山の方へまっすぐ行って着く場所が一つと、市役所よりに歩いて行く場所が一つです」

「かなり距離がありますね。歩きですか？これは」

「はい、私は車を持っていないので、友達と一緒に喋りながらいつも行っています」

「どれぐらいの時間がかかりますか？」

「ええっと、山のほうの銭湯は二十分ぐらい……。市役所の方は十五分ぐらいです」

「道衣さんは何時に銭湯に向かいましたか？それとそれを証明できる人はいますか？」

「はい。確か銭湯に向かったのは九時ぐらいに家を出て、その道中五分ぐらいあとだったような、藤原さんと出会いました」

「その後は誰にも会ってませんか？道中で」

「はい、もう誰とも・・・」

「友達と歩きで一緒に行っているといっていましたね？じゃあ、事件当日も？」

「いえ、その日は友達は旅行に行っておりましていませんでしたので。一人で」

「道衣さんは事件当日、どっちの銭湯を利用していましたか？」

「ええっと、その日は市役所のほうを・・・」

「そうですね。最後に、そのアリバイを証明する証言者はいますか？」

「はい、その銭湯の受付の人です。私は常連なんで、その人にも覚えていてもらってるかと」

「そうですね。ありがとうございます。聞きたいことはこれだけです」

俺は立ち上がり、道衣さんを見下げた。とりあえず聞きたい事は聞いた。じゃあ、次だ、次。

「あのう、桐ヶ谷さん」

「何でしょう」

俺は何うような表情で道衣さんを見た。

「私はやっていません！確かに戸坂さんは乱暴で家賃も滞納してました。でも、殺そうとまでは！」

「やった、やっていないかは僕と警察が決めることです。やっていないのならやっていないで堂々とすればいいんですよ。真実はいつも一つ。決して真実は嘘をつきません」

俺は業務的な笑いを浮かべ、首をかしげた。

「はい・・・」

道衣さんは俯き落胆したような声で言った。

「じゃあ、これで」

俺は頭を下げて、そのままその場所を後にした。

「あのう、警部さん。あの子はいったい何なんですか？」

道衣は宇佐美に対して聞いてきた。確かに、あんな聞き方をしてくる高校生なんか見たこと無い。まるで全てを見透かしたかのようなあのだ。いったい何者が気にするのも無理は無い。

宇佐美はキョトンとしながら道衣の方へ向いた。

「言うなれば、探偵の気質を持った子ですかね。彼はどんな事件の謎も解いてしまう。謎と言う迷宮から真実を導き出す、言わばアリアドネのような子ですよ」

「アリアドネ・・・ですか」

訳が分からない。それはそつだ。これは神話の話だ。興味がある人にしかわからない。

「では、失礼」

宇佐美は頭を下げてそのまま道衣の部屋を後にして、一真を追うようにして歩いていった。これじゃあ、どっちが師匠か分からない・・・。

宇佐美は心中で溜め息を吐きながら一真の背中を追った。

## STAGE 9

「なんたる、これ」

友里が殺害現場の隣にあるコーラス室である物を見つけた。たぶん積んだか積んだかされていた机のうちの一つだろう。その机の脚に、何か糸ですったような跡があった。

(そういえば、一真も死んだ人に何か見つけたようにずっと見てたような……。でも何だろう?)

友里は顎に手を当て考え込んだ。しかし、自分の推理力は一真ほど高くない。そんなこと分かっていた。一真が見つけた物なんてあんまり分らない。

(一真……)

友里は自分の携帯に目を落とした。一真に相談すれば何もかも一発だ。きつと「そう言う事だったのか」と呟いて真核に迫る。しかし……さつき言われたばかりだ、恵梨香エリカに……。

いつ一真がいなくなるか分からないよ?じゃあ、私達が先に一真より先に事件解いちゃおうよ。

「……」

友里は首を激しく振った。そうだ。一真はいつも危険な事件に首を突っ込んでいる。あのときだって……。あの時だって、一真は……。

あの時のことが思い出してくる。思い出したくも無いのに思い出してしまう。あのときの銃声が、耳にフラッシュバックしてきた。

「友里?」

「……!」

横から突然恵梨香の声が聞こえてきた。恵梨香は友里の顔を覗き込むように友里の顔を見ていた。とても背が低くて整った顔立ちをしているかわいい子だというのがまず一つ目の第一印象だった。しかし、何故だかいやな感覚がする。恵梨香もどうやら一真に気があ

るみたいだった。はつきりとは分からないが……。しかし、傍から見てたらかなり中が良いみたいだった。

「ねえ、えりちゃん」

「何？」

「えりちゃんは一真のことが好きなの？」

突然の爆弾発言。ファットマン並みの威力の言葉が恵梨香の頭上から落下してきた。

「な、なな。何言ってるの！？私は別に一真に気があるとかそんなんじゃないから……」

恵梨香は顔を真っ赤にして最後の口を尖がらせて友里から目をそらせた。爆弾発言なんか予感していなかった。まさか、友里からそんなことを聞かれるなんて……。確かに、恵梨香は一真を監視、及び観察のために桐ヶ谷けに世話になっっているが、そんな感情なんて微塵にも思っていないかった。と言うより思いたくなかった。

（だって……。あいつは私達と住む世界が違う。現実側リアルの人間で、私は仮想側ゲームの人間だもの）

ジュールは言っていたが、これの事だろうか？融合しようとしているこの十二次元を修正すべく、ずっと任務に駆り出されていたが、こんなにも長い期間留まり続けた次元は無い。何でもってこんな所に留まっているのかさえ分からない。そんな考えをしているうちに、何だかいらいらゲージが溜まっていた。

事件が終わって家に帰ったらすっかり片を付けてやろうと思った。

さて、俺は市役所に立ち寄った後、警部の運転する車に揺られていた。はい、現状報告終わり。これ以上今から何も言う事はあるまい。さつき道衣さんの話しを伺ってきたが、あれではまだ足りない。確認がなかなか得られない。だから、今はもう一人の容疑者、斉藤昇さんのお宅に伺おうとしていた。その間に、俺は左胸を抑えた。左胸の心臓はしっかり動いている。当然だが、俺にとってはこれが

奇跡なのだ。あの事件だ。俺のトラウマとなったあの事件……。俺はあのときの銃声が、なぜかこの頃になって夢に出てくるようになっていた。何故だろう……。？やっぱ俺が他の世界とかかわってしまったからか？エリーとであったからか？俺にとってはいくらでも心当たりがあつた。しかし、ありすぎてどれのせいであろうたのかが分からない。

警部は表情を見て、口元で笑って前を見た。

「またあのときのことを思い出しているのかい？」

「へ？」

「凶星だね。確かに、あの事件は君の心、友里君の心に大きな穴を開け、トラウマにした」

「……………」

「でも、あの事件を迷宮入りから救つたのは誰とも言わず君だよ、桐ヶ谷君。君がトラウマを感じる必要なんか無い。君は紛れも無く悪の謎に真実の糸をたらずアリアドネだよ」

「そんな気休め程度の事件じゃありません。俺は……。一人救うことができなかった。しかも、俺は友里までも悲しませた。探偵としてなんか最低な配役ですよ」

俺は齒を軋ませた。前は友里にあの事件は気にしてないとか言っていたが、そんなことは無い。覚えている。あの銃声。あの事件に巻き込まれて死んだ人の顔。そして、最後の犯人の断末魔も……。何もかもを、だ。俺は……。あのときから探偵失格だ。

「失礼します。警視庁捜査一課警部の、宇佐美です。斉藤昇さんですか？」

警部はドアの間から顔をのぞかせている青年風の男の人に自分の警察手帳を見せて、すました顔で、また言葉を続けた。

「さつきは私の部下が来たと思うのですが、私もお話を伺いたいのですが、よろしいでしょうか」

「構いませんよ?」

斉藤さんは警部の顔を見上げて、その後で俺の顔を見て、大きく目を見開いた。どう見ても希望に満ちた顔だ。なんだ?まさかあのパターンか!?

「まさか、高校生探偵の桐ヶ谷一真!？」

「やっぱりだよ!大当たり!どこまで広がってんだよ、俺のその二つ名は!」

「そうですね?それが何か?」

俺は面倒くさそうな表情を浮かべて後頭部を掻いて答えた。勿論渋々と・・・。

「良かったあ!お願いだ、一真君!僕の無実を晴らしてくれ!」  
必死で頼み込んできた。ああ、もう暑苦しいったらありやしない!

「ああ、もうそれは分かりません!まずはあなたのお話を伺わないと・・・」

俺は斉藤さんを突き放し、溜め息を吐いた。困ったなあ・・・。  
俺は後頭部を掻いた。こういうパターンの人か・・・。しっかり捜査しないと怒るぞお?この人。激怒レベルだなあ、たぶん。

「じゃあ、お宅にお邪魔させていただいてもよろしいですか?」

警部は斉藤さんの脇から部屋を覗き込むような格好をした。

「どうぞ、こちらに」

斉藤さんは俺と警部を導くように体をどかせた。警部と俺はそれに遠慮なく入っていった。

「さて、事情を聞かせていただきますよ?」

今度は警部から話を始めた。おお、俺に全部仕事とられたからなあ、さつきは。悔しかったんだろうなあ。

「どうぞ・・・」

座敷越しで、宇佐美と俺、そして斉藤さんが向き合った。

「戸坂さんがお亡くなりになったのは勿論ご存知のことかと・・・

「はい、さつき刑事さん達から聞きました。まさか先輩が……。まあ、確かに乱暴でしたし、金にはうるさいし、酒酔いも激しくて……。でも、職場ではかなり好かれてたんですけど……。それになんで職場に顔を出さなくなってしまったのか……。僕にはそれがまず分かりません」

「そうですか、心中お察しします」

使うところ違うだろ、警部。俺は苦笑いを浮かべながら心の中で突っ込んだ。

「では、戸坂さんが殺された、四日前の十時ごろ、どこで何をしていたのかは覚えていますか？」

「ええっと、その時間は友達と遅くから遊んでいました。十一時ごろでしたら、僕はちょうどその町から離れていた時間でした。アライの証明ならその友達に聞いてください。多分、僕と同じ事を言うだろうし……」

「その友達と言うのは？職場の人ですか？」

今度は俺が話を始めた。

「はい、そうです」

「その職場とはどんな？」

「はい、楽器の制作工場です。主にピアノとか、その類の鍵盤を使うタイプです」

「そうですか、さつき道衣さんから聞いたんですけど、どうやらこの町には銭湯は二つしか無いそうじゃありませんか。あなたはどちらの銭湯をご利用ですか？市役所から一枚パクッて来ました。どうぞ、これに指を指してください」

俺はバサツと地図を広げ、床に広げた。

「桐ヶ谷君……パクッて来たって……。泥棒だよ？」

「そんなの知りません警部。あんなところに無造作に置く市役所が悪いんです」

「君ねえ……」

「じゃあ、指差してください」

「どこですか？」

齊藤さんはその地図の中にある銭湯の一つに指を指した。

「山の方ですか？」

「はい、あそこの銭湯は遠いですが、天然水が沸く場所なんですよ」

「まるで、温泉ですね」

「まあ、山から湧く湧き水でできた温泉ですからね、しかも銭湯だから安くて、安くて天然水の温泉を味わえるから結構人気なんです」

「そうですか、そう言えば齊藤さん。あなた、戸坂さんが職場に出なくなってから給料の六割もとられていたそうじゃありませんか。それで犯行を行ったって事は？」

「ありません！確かに、それが原因で僕の生活が苦しくなったのは言うまでもありませんが、その代わりに、先輩にはいろいろ相談に乗ってもらったりしてました！殺すなんてとんでも・・・」

「そうですか。私情はともかく、あなたのアリバイを証明する人はあなたの友人だけですか？」

「はい、その人たちだけです」

「すいませんが、その友人達の連絡先と住所を教えてくださいませんか？」

「え、ええ。どうぞ」

齊藤さんはタンスの上にあつたボールペンとメモ用紙を取り出し、テーブルの上においてすらすとその一緒に出かけたという友人達名前と住所と連絡先を書き出した。そしてそれを俺に手渡してきてそれを受け取った俺は「お願いします」と呟くように言って警部に手渡した。

「うん・・・」

警部は小さく頷き、服のポケットの中にしまいこんだ。俺に仕事を全部奪われて本気でしょげているみたいだ。声の調子で分かる。

ていうか、いつもの事だろ。さて、次は何を質問しようか……。俺は口を覆うように顎に手を当てて考え込んだ。そうだ、後一つあったな。

「次に聞かせてください。あなたはいつも何時ぐらいに銭湯に訪れていますか？覚えている範囲でお願いします」

「銭湯にですか？」

「はい。いつもの山の方にある銭湯です」

「いつもは仕事から帰ってきて家についてすぐに向かいますから、八時半に家を出ますから……。九時ぐらいですね、銭湯に着くのは……」

「じゃあ最後にお聞きします。あな……」

と聞こうとしたときだった。

「一真！」

後ろから突然ドアをバタンツ！と大きな音を立てて開いた。そして、それをやってのけた人物を見て言葉を失って頭を抱えた。警部はもうびっくり仰天。いきなりなもんだから腰を抜かせた。

「友里……お前犯罪だぞ？それ。不法侵入って言う奴だよなそれ」

「ご、ごめん」

友里は俺の顔を見下げるなり目尻を下げた。

「俺に謝るな。この人に謝れ。このじゃじゃ馬娘」

俺は首で斉藤さんの方を指して、溜め息を吐いた。なんだろうなあ……。俺この頃溜め息多いなあ。疲れてんのかなあ。

「うう……。ごめんなさい！」

友里は頭を下げて斉藤さんに謝罪の念を表した。って、何泣きそんな顔してんだよ。斉藤さんを悪者にしてんじゃねえよ。

斉藤さんはなだめるように手を揺らして、苦笑いを浮かべた。

「ま、まあいいですよ。鍵を開けっ放しにした僕の方が悪いからね……」

うっわ、やっさしい！俺なら毒吐くか、怒るかどっちしかないん

だけどなあ。じゃあ、俺は対極な事をしよう。俺はシツシツと友里を追いやるように手を振った。勿論、冷たい目をしながらだ。

「・・・・・・・・」

友里は俺に怒りに表情を見せるがごとく、顔を引きつらせた。漫画なら頭に怒号が見えるところだ。友里はプルプルと体を震わせ、俯いて、しばらくしてから震えを止めて、俺の方へ向いた。

「じゃあ、また後でね。一真」

友里は怒りの表情を覆い隠すように天使のような笑みを浮かべて俺に言ってきた。確かに目は笑っている。目は笑っているが口が笑っていない！友里は怒りをなるべく見せないように静かに出て行った。しばらくしてからバタガンツ！と言うあり得ない音を立ててドアが閉まる音をして、外でとんでもないズンツズンツと言う凄い足音がドア越しに聞こえた。俺・・・殺される。戦慄するわ。変なスイッチ入れちまったかなあ。

齊藤さんは苦笑いを浮かべながら俺の方へ向き直った。

「桐ヶ谷君にはとんでもないガールフレンドがいるんですね」

「ガールフレンドなんかじゃありません。トラブルを持ち込むトラブルそのものです」

俺は溜め息を吐きながら答えた。後でどんな仕返しがあるか楽しみにしておこう。

「で、最後に聞きたいことと言うのは？」

「へ？ああ、はい。最後じゃなくて、もしかしたらまだ二、三あるかも・・・・。じゃあ、聞きます。あなたはどこかへ出かける時は夜でしたか？」

「ああ、はい。そうです。仕事が終わった後なんで、いつもの時間です。そのときに五人の高校生ぐらいに人たちを見ましたけど・・・・。あの子をもしましたね」

「あの子と言うのは友里のことですか？」

俺は身を乗り出して聞き込んだ。

「はい。たぶん肝試しに行こうとしてたんじゃないかと」

「そうですね。ま、あいつはトラブルと同時に周りに流されやすいお人よしですからね」

俺は後頭部を掻いて、その後眼鏡の位置を戻した。

「では、もう一つ。これはあなた個人のことではないんですが、あの山には誰かが定期的に立ち寄りたりしてるんですか？それか、よく人が訪れるんですか？」

「そんな滅相うも無い！山姥伝説があるあの山に誰も近づきませんよ！」

「そうですね、ありがとうございます。聞きたいことは以上です。警部は？」

俺は警部の方へ振り向いて聞いた。

「君に全部持ってかれた・・・」

「警部・・・」

うつわあ・・・。マジでしょげてる・・・。後で謝っておこう。

俺は立ち上がり、座り込んでいる斉藤さんを見下ろした。斉藤さんはずっと俺の目を見上げていた。俺は目を閉じて、頭を下げ、そのまま出口に向かって歩いた。

「では、失礼します」

警部も、俺に続くように頭を下げてから、歩いてきた。

## STAGE 10

「警部、後の聞き込みは頼みます」

「へ？」

警部は顔をゆがませて、「？」マークを頭の上に浮かべた。いや、さつきまで俺に仕事横取りされた拳句、質問内容全部聞きだされて暇になったたくせにな。むしろ喜んでほしいもんだ。そろそろ俺達の親が稼いだ血税分働いてもらおうとするか。

「君はどうするんだい？」

「現場見てきます。歩いている間に考え事しますから、送らなくても結構です」

「そう、かい」

警部は小さく頷いて、俺の顔を見てきた。何を察したのか、すんなり納得してくれたようだ。

「分かったよ。君は現場を見てくるがいい。でも、本当に送らなくてもいいのかい？」

「はい、結構です。さつきも言いましたよ。警部の耳は節穴ですか」

「今日の君は毒ばっかり吐くね・・・」

警部は苦笑いを浮かべ、口元や目蓋をびくびくと動かしていた。

相当シヨックらしい。弟子にメチャクチャ言われてるからなあ・・・。そりゃシヨックだろうよ。でもやってる俺本人はメチャクチャ面白。

「では、警部お願いします」

「・・・・・・・・」

警部は大きく溜め息を吐いて、仕方なさを感じさせるような笑みを俺に向けた。

「分かったよ。そろそろ師匠の面目保たなくちゃね」

「・・・・・・・・」

やっぱり相当ショックだったんだろうな。

現場に付いたところにはもう夕方になっていた。そうだったな。たしかあの銭湯からは三十分歩か無くちゃいけないかったんだっけ。

俺は現場である廃校舎を見上げて大きく深呼吸した。

（後一步だ。後一步で真実にたどり着く）

俺は息を呑み、現場である開かずの間へと向かった。

さあ、狩らせてもらおうか。この謎の悪意を。

俺はいつものあの癖をした。

「友里、お前は帰れ。後は俺だけでやる」

「へ？」

俺は見たいものを十分に調べ終え、友里にこう言い放った。いきなりの驚愕発言にびっくりしたようだ。そりゃそうか・・・な？

「かえ・・・る？」

「そうだ。もうこの事件に関わるな」

俺は全てを見透かしたような表情を浮かべ、友里の目を見た。友里は後ろにたじろぎ、俺の目をずっと見ていた。そう、俺は確信づいた。こいつを、友里をこの事件から引き離す必要が絶対にあると、いうことを、俺は確認した。

「一真・・・なんで・・・？」

「なんでもだ」

でも、俺は答えない。何でだろうな。何でか理由を言いたくない。しかし、それが原因でトンでもないことになるうとは今の俺では思いもなかった。

「やっぱり一真・・・」

友里は俯き加減で呟いた。

「ゆ、友里……？」

「ばか……」

「？」

「一真のバカ……。大っ嫌い!!!」

「友里……」

何だろう。あんなにはつきり言われると、俺の心に何かの大きな打撃が加えられたような感じがした。俺は顔をしかめ、ゆっくり友里に顔を眺めた。友里の顔にはうっすらと涙が浮かび上がっていた。

「……ッ！」

友里は涙をぬぐい、そのまま俺の横を通り過ぎて走り去っていった。俺は振り向き、友里の後を追うおうとした。

「おい、友里！」

「いい、私が行って来る」

横から綾香が入ってきて、俺を制して友里の後を追った。なんだろうな。思いのほかのダメージだった。あんなはつきり言われるなんて、思っても見なかった。けど、むしろこれでいいのかもしれない。これで、あいつは大丈夫だ。百パーセントとはいえないが、あいつが利口なら、九十パーセント大丈夫だ。俺は友里が走った後を目で追い、現場を見つめた。

これでゴールだ。俺の確証が正しければ、きっと大丈夫だ。

俺がうなずくと、それに合図されたかのように携帯の着信音が鳴った。そこには「宇佐美淳二」というあの警部の名前が出てきていた。

「もしもし」

『もしもい、残念なお知らせだ。たった今、斉藤さんの友人たちが遺体で発見されたそうだ。単純な撲殺された遺体がね』

「そうですか」

『そんな気を落とさなくても……』

「いえ、こんなの言うのもあれなんですけど、この事件の犯人のめぼしがつきました。皮肉にも、その警部が掴んだその証言で……」

「へ？じゃあ、犯人は？」

「その前に、藤原さんのお話の内容を聞きたいんですが」

「うん。藤原さんは確かに、道衣さんの言う通り、道衣さんが銭湯に行こうとしているのを、見かけたらしい」

「それは逆に言えば、藤原さんにもその時間帯のアリバイがあると言うことになりますね」

「まあね、その後は部屋に入って、家族と団欒をしていたらしい。その場合のアリバイ証言も、ご家族さんの証言がある」

「そうですね・・・」

「どうしたんだい？元気がないよ？」

「いえ、何でもありません」

「で、桐ヶ谷君。犯人のめぼしがついているんだろ？誰なんだい？」

「犯人は」

俺はその犯人の名前を告げた。

「はあはあ」

友里はあの廃校舎から飛び出すように出てきた。友里は近くにある木の幹にもたれかかり、呼吸を整えた。トンでもないスピードで階段を駆け下りたからだろうか、なかなか呼吸が整わない。

「はあはあ・・・友里、いったいどうしたのさ」

後ろから綾香が息を切らせて後を追ってきた。友里の後ろで膝を突いた。よく見れば、頬に涙が伝っていた。何か吹き込まれたのだろうか。あの少年に。

「どうしたの、友里？何か桐ヶ谷君に言われた？」

「・・・」

友里は何も言わない。言いたくも無い。頭がごちゃごちゃで、考えられなくて、何でか悲しくて。言葉すら考えられない。涙も止め

られない。友里は流れ出る涙をぬぐいながら涙で赤い顔を綾香に向けた。まだ涙が出てくる。涙のせいで綾香の顔が見えない。

「どうしたの？言ってごらん？」

「か、かず・・・一真に振られた！」

「つて、振ったのあんたでしょ！あれじゃあ」

「だって、だってえ」

友里は顔をゆがませながら、綾香にすがりついた。

「考えすぎじゃない？友里。だって桐ヶ谷君にたつて誰か突き放して、好きな子と一緒に居たいなんて思うわけ無いじゃない」

「でも、一真、えりちゃんと凄いいいし、私は、いつも一真をひどい目にあわせてばかりだし・・・」

「ああ、こりやだめだ。友里が完全にマイナスモードだ。こういうときに桐ヶ谷君がいてくれればなあ」

とは言われても、今回の原因が一真にあるものだから、どうしようかと思ひ悩みたくなる。綾香は頭を押さえ、天を仰いだ。するとそこに、恵梨香が校舎から姿を現した。こつちもメチャクチャしよげてる。

「えりちゃん、どうしたの？そんなにしよげて」

「一真に嫌われた・・・」

「はい？あんたも？」

（あれえ？どつちも嫌われた？つたく、あいつは女に対してのデリカシーは無いのかねえ）

綾香は顔をしかめ、天を仰いだ。むかつくというより、呆れる。

この乙女二人の恋心を見事に打ち砕いたもんだから、相当その方面に関しては疎いんだろうか？あの男は。こりや、破滅確定だなと綾香は降参と言う風に手を広げた。

「桐ヶ谷君・・・あんな言い方して良かったのかい？」

俺は苦笑いで俺をなだめてくるさつき付いたばかりの警部にじと目で見つめた。仕方ねえだろ、あいつ、現場をメチャクチャにじやがったんだから・・・。

俺の目の前では積み重ねていた机が見事な崩れ方を披露して、惨状と化していた。

あいつ・・・。俺は頭を抱えて溜め息を吐いた。クールなんだかドジなんだか・・・。よりもよって何で俺がちよつと見てみてる間にあいつは机の脚に引っかけたかかって崩すのかねえ。これじゃあ、どれがどれだか分からなくなったじゃねえか。俺は後頭部を掻き篁り、机の山を見つめた。メチャクチャだ。何もかも。友里に嫌われるわ、エリーには思いつきりぶん殴られるわ。今日の俺の体と心のダメージ、尋常じゃないな。

「で、桐ヶ谷君。証拠はあるのかい？」

「証拠ですか？証拠なら犯人の証言の中に取りましたよ。しつかりと」

「へ？そうなのかい？」

「ええ。でも、それは物理的な証拠にはならない。とっ捕まえるには現行犯で捕まえるのが妥当だと思います」

「現行犯ってまた誰かが死ぬのを待つって事！？」

「殺させませんよ。だって、犯人の次の標的ターゲットぐらい、分かっただけから」

俺は確信づいたような表情の笑い顔を見せて、警部に頷いた。警部は真剣な顔持ちになり、息を呑んで俺のアイコンタクトに答えた。俺は犯人を捕まえる。そして、俺の目の前では誰も死なせはしない。俺はあの事件から決めているんだ。

「はあ」

友里は溜め息を吐きながら、山を降りてきた。恵梨香には綾香が

付いており、どうやらゆっくりと降りてくるらしい。友里は緋色に染まった空を見上げ、立ち止まった。

(何でだろう・・・)

何でこんなにももやもやするんだろう。何でか全然分らない。

(私、なんだかこの頃一真のことメチャクチャ意識してる。でも、何でだろう)

考えたところで答えが見つかるはずも無かった。

「はぁ・・・」

友里はまた大きく溜め息を吐いた。溜め息を吐いてから、歩き出した。たしかここを一回曲がったらその後二角目で曲がった後、その後は・・・。

覚えてはいるが、口に出すとややこしくなるような道の手を、ようやく宿泊している宿に着く。良くこんな道を覚えた物だ、と友里は自分に対して感嘆した。

友里はぼーっとしながら、その曲がり角を曲がった。そして、倒れた。

友里が目を覚ました頃には、もうあたりが真っ暗になっていた。なんだか意識がぼやける。あの時曲がり角を曲がった瞬間、首筋に何か突き刺さるような感覚があった後には・・・。何も覚えていない。動こうとしたが全然動かない。何かで手足を密着させられている上、椅子に座らされている状態だった。立つこともできない。口にも何かは何重にも貼られている、何て事にたどり着いた瞬間自分がどこかに拉致されている上縛られていることによりやく気づいた。

(でも、何で?)

友里にはまずそれが意味分からなかった。自分は何かしたような覚えは無い。でも、何かした覚えが無いのに、どこかに監禁されている時点で、自分は何かしたということだ。

(そういえば、一真も)

一真が言っていた。

もうこの事件にかかわるな。

あの時、友里は一真を疑って噛み付いた。友里にはもうあきらめに近い感情がこみ上げてきた。

（そつか、一真が言っていたのはこういうことだったんだ。一真を疑ったから罰が当たったんだね）

友里は顔を俯かせ、目を閉じた。

すると、向こうからガラガラと言う何か、たぶん金属バットだ。

それをじめんに引きずる音だ。その音が聞こえた瞬間、訳の分からない恐怖感が友里の感情を食らった。

「う・・・ぐッ！」

友里は必死でもがいて見せたがただ体に巻かれた縄がきつく締まって余計痛くなるだけだった。ガタガタと椅子が揺れるだけだった。暗くて犯人の顔が見えない。犯人のシルエットが浮かび上がるだけで、恐怖心がこみ上げてきた。ついに友里の近くに来た。友里は目を見開き、戦慄した。

「ッッ！」

声にもならない呻き声を上げながら、犯人の顔をにらんだ。金属バットはなるべく見ない。見たら怖くて何もできない。だから、せめて自分は完全な敵意を犯人に見せていた。金属バットが上に掲げられた。友里はそのバットに釘付けになった。

（一真・・・）

学校で見せる一真のあの気だるさそうな表情が思い浮かんできた。

（一真・・・ッ）

一真が事件を推理するとき顎に手を当てるあの表情を浮かべた。

（一真ッ）

あの一真がたまに見せるあの爽やかな笑顔が思い浮かんできた。

そして、バットが振り下ろされた。

（一真、助けて！）

友里は顔をそらせて、目をつぶった。

「やっぱりあなたが犯人でしたか」  
部屋の陰になっっている角の方から声が聞こえた。

「・・・ッ！」

犯人がうつろたえて、バットを止めた。キョロキョロと辺りを見渡し、俺がどこにいるかを探し出そうとしている。

「俺は、あなたの証言からもう犯人だということは確信づいてました」

俺はひっそりと友里の隣に入った。俺は友里の口に貼られたガムテープを勢いよく剥がした。

「そうですね。齊藤昇さんさいとうのぼる」

俺は、友里の戸惑っている顔をうかがいながら、犯人の顔を時計型LEDライトで照らした。齊藤は目を見開き、俺の全てを達観したような表情を見た。

俺は友里の顔を見下げて、笑い掛けた。俺はポケットからツールを取り出し、ナイフを引き出して、友里を縛っている縄をとっと切った。手足の拘束から解放された瞬間の解放感のせいか、一瞬気が抜けたように呆けた表情を俺に向けてきた。俺は溜め息を吐いて、手を差し伸べた。友里は俺の差し伸べられた手を掴み、俺は友里を立たせた。

友里は俺の顔を見つめて俺に微笑みかけてきた。

「一真・・・助けに来てくれたんだね」

「乙女心全開の中悪いけど、俺はお前がこの開かずの間に拉致される前からあのコーラス室で張ってたぞ？俺」

「へ？」

いきなりのぶち壊し発言。ホントに場の空気読まないなあ俺。けど、あの状況考えてみる。俺がここにいなかったら、俺はあのドアをぶち壊して入ってきてるぞ？

「じゃあ、私が殺されそうになるまでずっと見てたって訳え!？」

「まあな、俺が集めたのは状況証拠ばかりだったからな。そういう中で捕まえる方法は、現行犯しかないって思ってた。だから、斉藤さんには、監禁、及び殺人未遂の現行犯で捕まってもらおうってな」

俺は得意げに笑って、友里の顔を見た。乙女心ぶち壊しにされたせいで、ふくれっ面になっている。

「何でだ？」

「ん？」

「何で俺が犯人だということ？」

斉藤さんは金属バットを放り投げ、俺の方へ睨みかけてきた。

「だから言ってるじゃないですか。あなたの証言で、それが確定付けされたって」

「なに？」

「あなた言ったじゃないですか。いつもいつてる銭湯先で、友里を含む高校生達五人を見かけたって。あの時に廃校舎に向かっていたのは、仁舞高校空手部総勢五十七人のはずなんです。でも、あなたはよりにもよって、五人と言ってしまった。これはどういうことか。それは友里たちがこの廃校舎に入ってきて、その友里たちのグループ五人をみて、あなたはうっかり五人だけで来たと思っただでしょう。それで、あなたが犯人だということは確定付けられませんでした。それに、あなたならこの密室トリックを仕組むことも非常に簡単だということだということも分かりますからね」

「何で？」

友里が横から聞いてきた。

「ピアノ線だよ。今回の密室トリックはピアノ線と、糸を使用して行われた簡単な、それどころか小学生でも簡単にひらめくような密室トリックだったんだ。ほら、お前が見つけたって言う机の脚についていた何かがこすれたような細い跡あったろ？あれと、俺が見つけた戸坂さんの鍵が握られていた手の薬指と中指の間に小さな切り傷があった。それをつなげたら、簡単だろ？あらかじめ糸とピアノ

ノ線をくくりつけ、糸のある方に鍵を結んで、鍵に近い方をすり減らしておいて、少しの力でも簡単に切れるようにしたんだ。戸坂さんの中指と薬指を密着させ、あらかじめ鍵を開けておいたコーラス室の方へそのピアノ線を持って行き、引っかかったところで、思いっきり引っ張る。そうすると、すり減らしておいた部分の糸が切れ、戸坂さんの手の中に鍵が残る。その過程で、戸坂さんの手の薬指と中指、そして、誰も入れないように積んでおいた、机の脚にピアノ線の跡である細い傷跡が残る。そして、思いっきり引っ張った際、中指の付け根の裏側に、ピアノ線で切った跡がありましたよ。そして、向こう側の非常階段から降りていって、そのまま現場を後にする。コーラス室の鍵は市役所でも訪れて、勝手に持っていたんですよ。市役所の方が言っていました。あの廃校舎の鍵のうちのひとつが盗まれた、と。ま、その後川に捨てるなりして処分したんですよ」

「でも、動機は何？それに、私たちが山姥って、この人なの？でも、シルエットからしたらぜんぜん体系が違うよ？」

「その山姥の正体は戸坂さんのほうだ」

俺は簡潔に答えた。

「おそらく、戸坂さんは斉藤さんに呼びだされ、この開かずの間に来たんだ。もちろん、そのときにはもうすでにあのコーラス室に斉藤さんは待ち伏せ、戸坂さんが来て、お前たちが去ったあとに、お前みたいにスタンガンであるのコーラス室に拉致して、そこで無防備なとさかさんの心臓を刺して殺したんだろう。証拠に、あのコーラス室にはわずかな血痕があった。けど、戸坂さんの死体の周りには血痕がひとつも無かった。それが証拠さ。動機はおそらく、金銭関係。斉藤さんは毎月給料の六割もの金をとられていた。それだけでも、十分動機にはなるんだけど、後ひとつ。警部に教えてもらったんだけど、斉藤さんがフリーターになった原因というのが、大手会社の倒産だったんだ。斉藤さんはもともとそこで働いていたんだけど、去年に倒産。負債は社長が全負担して、自殺。働き手が見つ

からない斉藤さんはフリーターになったんだ。それを知った戸坂さんは、毎月給料の六割を渡さなかったら、この事実を親、及びそれ以外の関係者にばらすと脅していたんだ。けど、毎月六割も取られるもんだから、いつかそのツケが回るに決まっている。そのツケがとうとう回り、戸坂さんに打ちやめを求めた。けど、そんなことすればばらすとまた脅された。けど、斉藤さんは戸坂さんの目の前で全てを両親にばらして、完全に打ちやめに追いやる事が出来た。けど、そんなことした物だから、戸坂さんに殺意が芽生えた。ま、先輩としてのおごりだろうがな。あの包丁には戸坂さんの指紋が確認できた」

「じゃあ、私たちが見た光った物って、ナイフ？」

「そうだよ。戸坂さんが斉藤さんを殺そうとしたナイフだ。けど、斉藤さんはそれが分かっていて戸坂さんが自分のことを殺そうとしていたのがな。だから、そのお前を気絶させたスタンガンで迎え撃った。でも、今でも分からなかったのは何でいちいちあの部屋に拉致する必要があったのかということです。差し支えなければお答えください」

俺はまだいつものような調子で斉藤に聞いた。斉藤は手から金属バットを落とし、俯き加減で答えた。

「この部屋は元から音楽室だった。俺の実母はこの学校の音楽教師で、生徒受けも良かったんだ。歌声は綺麗だし、相談も良く乗ってくれていたそうだった。けど、ちょうど四年前、その母が心臓発作を起こして、突然急死したんだ」

「過労ですか？」

「うん。その後まもなく学校側の過度労働が発覚となって、あの学校は廃校。今に至ってるんだ。でも、この教室を訪れるたびに、今でも母がこの教室であるピアノで母の好きだった曲を弾いている気がして、今でもこの教室にいると思ってる・・・」

「でも、あなたは戸坂さんがあるう事か、ここに呼び出した。それか呼び出させるように彼に仕組まれた、ですか？」

「うん」

「で、その母親の前で人殺しなんか犯す事なんてできなかった、だからコーラス室で戸坂さんを殺した」

「うん」

立て続けに頷く斉藤に俺は溜め息を吐いて、後頭部を掻いて冷たい目で斉藤さんを見た。

「でも、あなたはここであろう事が友里を殺そうとした。あなたは人を殺したことで、ただの人間じゃなくなってしまった。それにどんな理由があろうと、人を殺す理由なんかに変えることなんかできません。何でああなたは警察や他の人たちを信じなかつたんですか。あなたはただただ甘ったれてただけです。人殺しにすがりつき、証拠を隠滅するために友里を殺そうとした。あなたに、どんな私情があるかと、俺はあなたを許すわけには行きません」

俺がそう告げると、斉藤は地面に手を突き顔をゆがませすすり泣くように地面に顔をつけて泣き出した。

しばらくしてから、俺が呼んでおいた警察の人たちが駆けつけ、斉藤はあえなくお縄に付いた。俺は警察に連れられていく斉藤の背中を見送り、友里の顔を見下ろした。友里は俺の視線に気づいて、じと目で俺を睨んできた。勿論俺はその目にたじろぐ。

「まだ何かあるのかよ」

俺は顔をゆがませながら苦笑いを浮かべた。

「一真、私を囿にしたんだね？私が殺されそうなところをずっと見てたんだね？」

「止めたじゃないか。文句なんてあるのか？」

「ある！」

思いつきり叫ぶように言ってきた。ああ、耳いてえ。昨日今日耳のダメージ 深刻だ。

字あまりしたが川柳で来た。そろそろ難聴になるかも……。俺

はそう思いつつずっと友里にふくれっ面を見続けた。それを見ているうちになんだか滑稽に思えてきて、口元を笑いを浮かべて溜め息をついた。

「悪かったな。怖い思いさせちゃって」

「へ？」

「お前が次の標的ターゲットだつて気づいたとき、絶対こいつは守らなくちゃなつて思ってたんだ。現行犯で逮捕するしか、もう手段が無かつたしな。他の奴じゃ、そこまで思わなかつただろうな。死なせてはいけないって思うだろうけど、傷をつけちゃいけないって思うことはなかつたと思うぜ。お前みたいに」

「一真……」

友里は頬を赤くして俺の目を見つめてきた。俺は友里の顔に向かって、笑いを浮かべた。

「ま、じゃじゃ馬娘の怪力女だから、あんな縄程度は勝手に引きちぎるだろうなあとか思ってたけどな」

「もう！」

友里が最速の右ストレートを俺の至近距離から繰り出してきた。俺はそれを首を傾げるだけで交わして見せた。かわされた本人はふくれっ面になつて。ぷいっとなつぽを向いてしまった。全く、こいつと来たら……。俺は苦虫を潰したような表情を浮かべて、ふうっと息を吐いた。

「一真……」

「ん？」

「ごめん」

「なにが？」

何がだよ。何で謝る必要がある？お前なんかしたっけ、俺に？

「私、疑ってた」

「????????」

……。すげえ俺の台詞の中に「？」がこんなにも続くなんで……。それだけ意味不明だったて事だろう。

「一真、あの時私を追い払ったの、一真がえりちゃんと二人で居たいからって思ったから・・・」

「・・・」

とんでもない勘違いをしているんでございますか？友里さん。あいつは確かに見た目は　だ。見た目はな。あいつはお前以上のじやじゃ馬娘で、手のつけられん怪物だ。都合が悪くなれば俺をどつこうとするか、俺の耳元か至近距離で叫びやがる、とんでもない迷惑な奴なんだぞ？ま、あいつは俺以外の人間お前じゃ、人格を変えて普通の少女にはや変わりするがな？

「でも、一真は私を守ろうとしたからだっただね」

「まあな。でも、俺はあの時判断を誤った。お前を一人にさせてしまった。そのせいで、お前に怖い思いをさせてしまったのは変わらない。悪いのは俺だ」

俺は友里に対して、淡々と言うことを言ったような口調でそう告げた。

「一真・・・」

友里が上目遣いで俺の顔を見てくる。

「早く帰ろ、一真！」

友里が俺の腕を掴んで駆け出した。

「あ、ああ」

俺は友里に吊られて走り出した。

でもな、友里。俺とエリーは同居状態に陥っていること、知っているか？

なんてこと、口が裂けてもいえないよな・・・。俺は一人苦笑いを浮かべた。



STAGE10 (後書き)

感想をお願いします！

## STAGE 11

「いつてえ」

俺は耳を押さえ、階段を下りてきた。俺の家には二階と一階それぞれに風呂があるが、あろう事か、エリーが脱衣中に洗面所に入ったせいで、思いつき「一真のバカーー！！！」とか飛行機のモーターエンジン音顔負けの大音量で、叫ばれた挙句、「お前、小さいな」とかとんでもなく素直で馬鹿な発言するもんだから、（もちろん見てない。それは差し支えなく・・・）エリーのバツクキツクをもろに横腹に食らった。あいつ、俺に攻撃をかわされ続けてコツを掴んできたらしい。俺への攻撃の当て方を分かっってきた。もうふざけないでおこう。気づいたら境界を発動させられてマジバトル勃発だ。その最悪な事態は避けねばならん。多分死ぬのは俺だ。風呂から上がったってきたエリーは俺の中学生のころのＴシャツを勝手に拝借して、着込んで、下にはまた俺の中学生ぐらいのころの短パンを勝手に拝借してはいていた。とは言えども、Ｔシャツはよれよれだから肩が見えるし、短パンも膝下まである。本当に胸も身長もこいつ小さいなあ。もう部屋のベッドに腰掛けていた俺はそのエリーを見て肘を突いてふうっと息を吐いた。

「何？」

エリーが俺のことをじと目で睨んできた。これが本当のエリーだ。昨日開かずの間の事件を解いて、帰ってきたの第一声知ってるか？

お前は、私か友里、どっちがいいのよ！

お前思わせぶりなことを言ってんじゃねえぞ？それかカマ掛けか？それとも妬いてるのか？でも、俺はどっちも選ぶつもりはない。どっちも怖くていつ命が終わるかかわかったもんじゃない。

俺は溜め息を吐きながら、「別に」と流した。エリーはそんな俺の態度に仏頂面になる。いらいらが募っていることが分かる。やばい・・・かな？修正の合言葉は？そんな都合のいい言葉があればい

いんだけどな……。

「ああ……。あのときの言葉覚えてるよな？」

「……？」

あのときの言葉とは、お前は、私か友里、どっちがいいのよ！とか言うカマ掛け言葉だ。こいつを曖昧な言葉で答えてからだった。こいつの機嫌が急激に悪くなったのが……。

エリーの頭の上に豆電球が見えた（気がする……）。

「ああ……。あの時のね」

「分かったのか？」

「ええ。で、どっち！」

「どっちも要らない」

簡潔に答えた。簡潔すぎてむしろ言っててすっきりする。俺はな……。こいつの体が……！！

「お、おい、エリー？」

「ばか……」

「は？」

またかよ！またスイッチ入れちまったのか！？俺は！？エリーの体がプルプル震えてキツと俺の目を見てきた。

「一真の馬鹿バカばかああッ！！大ツツツ嫌いッ！！！」

「ぐあっ！？」

耳が……。耳が死ぬ……。一昨日昨日今日と、とんでもないダメージが俺の耳に予想をはるかに凌駕する量で蓄積されていた。

しまいには本日二度目のバツクキツクをお見舞してこようとしてきた。

「うおっと！」

右足で俺はエリーが踏み込んだ足の方の骨盤を押さえて、攻撃が届かないようにした。って言うより、そのまま乗りで足で押し倒してやった。

「ひゃっ！」

どてつと愉快的な音を立てて尻からこけたエリーは苦悶の表情を浮



「えりーちゃん。何かされたの？一ちゃんに」

「……………」

何もしてないんだろうけどなあ？ま、こいつだから…………。

「一真に押し倒された……………」

ぶるぶる震えながらトンデモ発言を口にしやがった。それだけを断片的に言いやがった！？こいつ、それだけ言っちまったら…………。

「あらあら…………一ちゃんったら」

「……………」

俺の背筋に何か冷たい物が滴り落ちてきた感じがした。すっごい寒気がする…………。女二人を敵に回した俺の命は一体いつまで持つのだろっかって言うぐらい怖い。

お母さんに至ったら、目は天使の笑顔で口元は悪魔の笑顔だ。マジで怖い…………。何考えてるんだろっ…………？想像したくも無い…………。

「エリー……………」

「ん？」

「すっこんでろ……………」

俺はエリーのほうを見上げてこのじゃじゃ馬娘を睨んだ。向こうはゾクツとしたような表情を浮かべて顔を引っ込めてバタンツ！と戸を閉めた。

「一ちゃんったら」

今度は呆れたような口調で母さんが言ってきた。ああ、まだこっちを済ませてなかったな。

俺は溜め息を吐きながら母さんの方へ振り向いた。母さんは全く何してるんだという呆れたような表情を浮かべて腰に手を当てて俺の顔を見ていた。

「冗談に決まってるでしょう？あんな怒り方しなくてもいいじゃない」

「いいんだよ。あんなじゃじゃ馬娘なんか、こんぐらいの扱いで大丈夫だ」

「一真！」

母さんが俺のことを正式な名前呼びした。これはガチだ。こつちも真剣に向き合わなくては……。と思つたら突然電話が鳴つていのをリビングの方から聞こえた。その音をお互い黙つて聞いていた。

「行けよ」

俺は事件の捜査しているときのようなそんな口調でお母さんに言った。お母さんは口をほんの少し尖がらせた後、小さく溜め息を吐いて階段を下りていった。

俺は舌打ちを打ち、そのまま部屋に引き返した。

部屋に入ってみるとエリーは俺のベッドの上に腰掛けて、ギタンギタンと音を足しながら体を上下させていた。

「一真？」

俺はエリーのほうへ歩き寄り、エリーの顔を見下げた。エリーは黙つて俺の顔を見上げていた。

「全く……」

俺は手を伸ばし、エリーの頭頂部から生えているアホ毛を摘まみ、それを引っ張つた。

「ひぎゃっ！」

エリーは思いつきり顔をしかめた。俺がアホ毛から手を離すと、エリーは俺を見ながら頭のアホ毛を両手で押さえた。片目には薄っすらと涙を浮かべて片目をぱちくりさせていた。おや？案外こころ引張られるのが弱点なのか？

「ほら、とつとと向ここの部屋に行つて来い。寝るのに邪魔だ」  
「……………」

エリーは頬を膨らませながらぷいっつとそっぽを向きながら立ち上がり、俺の横をすたすたと通り過ぎて、俺の部屋を立ち去った。

俺は溜め息を吐きながらベッドに座り込んで体を倒した。なんだ

か、エリーと出会ってから俺の日常がとんでもない方向へ崩れてしまっている。俺の普段の日常もどうかといわれても普通じゃなかったけど、それがまたさらにおかしくなってしまうている。狂っている。俺はごちゃごちゃしそうな頭の中を打ち消すかのように、目を閉じた。

勿論俺はその後、風呂に入り、寝る時に来ているジャージ（と言うより下だけで、上は適当に取ったTシャツ）を着て、そのまま布団の上に寝転がり眠りについた。

そんな普通のことがあったの翌朝のことだ。（変な文章・・・）鳥のさえずりまでは聞こえなかったが、さすが夏と言うことだけあって、結構な日照りだ。もちろん掛け布団なんかある訳がない。寝てる間に熱中症になって下手すればお陀仏だ。・・・大袈裟かな？

まあ、苦しい夜を過ごす事になるだろう。俺は目を開けずに携帯を探り探りしてみた。いつも起きて待ち受け見てたらトンでもない数の迷惑メールがあると云うことが日常茶飯事だ。

俺がそれをしている間に俺の鼻覚に何かしらの感覚があった。

「んあ？何だこのいいにおいは・・・」

俺が探り探りしている手に何か触れた。やわらかい感覚。何だこれ？次には髪の毛のような感触。毛先が整った髪の毛。重いまぶたがやっと開くようになって開いてみた。俺の今日第一に見たものは？

「・・・・・・・・」

エリーの気持ちよさそうに寝る寝顔だった・・・。

「ぐあっ!？」

何だ？これ。なんのびつくり展開だ？いやいやいや！ある意味ホラーだよ！怖あ。俺が爆睡中に何があったんだ？アニメにあるようなこんな展開誰が予想する？サプライズ過ぎるだろ！

『グッドモーニング！カズマア!』

俺の懐に入っているPLDから声が聞こえた。少し高めの声質の男の声。そして、この馬鹿口調。

「ジュール、現場報告要求及び、その経路」

「現状見たまんま。その経路知りたいなら、下に下りてみるべし」

「・・・・・・・・」

俺はとりあえずジュールの言うとおりにしてみようと思った。今このタイミングでこいつが目を覚まして、この状況が知れたら、もう大変だ。逆上される・・・。

俺はそろりそろりと部屋を立ち去った。

さて、下を降りてみたら何が起きている物かと思ったら・・・。すごい光景が俺の目の前で展開されていた。

「父さん・・・？」

俺の父さん、桐ヶ谷優作きりがやゆうさくは世界でのミステリーファンなら名を知らない日本きつてのミステリー推理小説作家だ。すごい「新一」とかぶるキャラだな、俺は。性格はあえて言うなら、自由人。締め切りギリツチヨの癖に、「ロンドンへ旅行してくる」なんて言い出すようなお気楽者。とりあえず、何かに縛られることを良しとせず、自由気ままに人生を過ごすという楽観主義者。おかげで、息子である俺の出来は、基本能力は他よりずば抜けても、何か抜けてしまっていると言うような人を嫌がらせるような出来になってしまった。勉強しなさいとかこの父さんの口から聞いたことなんかこの方十七年間一度も聞いたことがない。もはや幼いころから放置されてきた俺。人より自由に行動するようになったのは、言われずとも、この父さんからの遺伝だ。

父さんの容姿をあえて言うなら、俺に似ている。俺の癖のある髪型はこの父さん譲りだ。父さんは俺と違って、眼鏡をかけておらず（俺は伊達眼鏡だけ・・・）理由としては、かけてたら自分の行

動に制限が出るから、らしい。ただ、その代わりとして、ひげを生やしており、どこか、ジェントルな風格を表している。

父さんは新聞を片手に持ち、コーヒーカップを片手に持って、こんな暑い夏だと言うのに、熱いコーヒーをすすっていた。

俺の存在に気づいたのか、片手のコーヒーカップをテーブルの上において、俺に向かって微笑み掛けてきた。

「起きたのか。久しぶりだな、一真」

「父さん……。つたく、父さんの冒険好きには困るぜ。こんなに離れたのはいつ以来だっけ？」

「そうだなあ、旅に出ると言うことは俺の胸を常に躍らせてくれるものだから、いつぞやのことか、忘れてしまったなあ」

父さんは顎に手を当て、考え込んでいた。つたく、相変わらず仕事はむかつかくなあ。わざとらしいから余計ムカつくんだよ。

「一真……？」

二階からフラフラと階段から降りてきた。目をごしごしと擦りながら降りてくるものだから、何だろうなあ……。思いもよらない感情がこみ上げてくる。

「エリー？」

「はっはっはっは！」

父さんが朝っぱらから盛大な笑い声を上げた。何がおかしい？

「暗いと、この家に居候していると言う、女の子の顔が良く見えなかったからな。まさか、こんな可愛い子だったとは。うん、友里ちゃんとなかなかいい勝負だな、一真」

「俺に全振りかよ……」

俺は苦笑いを浮かべながら、エリーの寝ぼけ顔を見た。エリーはあくびをしながら、のろのろと卓に着いた。おいおい、そこ俺の席……。

気づけば俺の席がなくなってる！？

俺にしか不幸が降り注がないなあ。嫌になるわ……。

「で、エリー。今日は俺を拉致するような形でどこに連れて行く気だ？」

「だれも拉致してない！ちよつと、一真にも手伝ってほしいことがあったから・・・」

「手伝ってほしいこと？お前にしては珍しいな。いつも俺のことを放っておくくせにな」

「放ってってるのは、あんたでしょ！ったく、わざわざ私が手伝ってなんていってあげてるんだから、上目線になれて満足でしょ？」

「別に？無理に言ってるんだつたら、無理しなくてよるしい。帰る」

「へ？」

俺はエリーから背を向けて、スタスタと歩き出した。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！」

俺の後ろでエリーが大声で叫ぶとかするようなレベルで、俺を引き止めた。俺は鬱陶しい物を見るような目で、エリーのほうへ振り向いた。

「んだよ、俺は何とか無理して連れてきましただろ？じゃあ、一人で行ってらっしゃい」

俺は手を振り、またそのままスタスタと歩き出した。

「一真あー！」

「・・・」

安定のスルー。ここは無視無視。こういつじゃじゃ馬娘の言うことなんか一〇〇%で聞いてたらとばっちりを食らうと言うのがオチだ。それは友里の件でもう充分把握している。

「無視しないでよ！」

おつと、さすがに振り向かなくては周囲の目が白目になるような状態か？俺はあくまでも冷たい目をしながら、エリーのほうへ振り向いた。エリーは口をとんがらせて、俺から目をそらせていた。

「私が謝るからさ・・・」

「……」  
Sとツンの戦いに軍配が上がったのは桐ヶ谷一真こと、Sの方  
らしい。

## STAGE 12

「ほわぁー……」

エリーが俺の目の前でいまだに見せたことの無いような目の輝きで、襖二つ分のでかさを誇るショーケースの向こうのパンを見つめていた。こいつ、パンが好きだったのか？

俺は首をひねりつつ、小さく鼻で溜め息を吐いた。

「うわぁ！こっちにはドイツのシュテルンゼンメルがある！」

「お前、んなもん分かるのか？」

「うん！パンの上部に星型の溝があるでしょ？これは焼く前に十字型に切れ込みを入れた証拠！私まだ食べたこと無いんだあ……どんな味なんだろう？」

「……」

こいつがこんなに輝いて見えたのは初めてだよ！まあ、それもそうかなあ。このベーカリーは四週間ぐらい前にできたばかりだが、三階建てと言うベーカリーにしては大きく、開店当日に全国ネットのテレビに映ったぐらいだ。父さんだってそれを電話で報告されたときに……。

しまった！もう少し日本に居ていればなあ。

とか、結構ショックを受けていたのを覚えている。電話越しで聞いてただけど……。そんなところをパン好きのこいつが（今知ったばかりだけど……）その情報をキャッチしないわけが無い。

ん？待てよ？こいつが手伝えって言ってる事はまさか！？

「一真」

「ん？」

「このショーケースにあるパン全部おごって！」

「……」

やっぱりな！こうなるとは思ってたよ！俺は基本おサイフケータイで物の代金を支払ってる。つまり、「今金持ってないから、払え

ません！」とか言う言い逃れはできない！

「おサイフケータイでしょ？払えるじゃん」

これで言い逃れはできなくなった……。どうする？俺。支払えないことは無いが……。やっぱり嫌だよ！こんだけの数を買えば、どんな額になる？誰が持つんだ！？これだけの数を！

「エリー？もう少し数を絞って……」

「やだ、これ全部」

「……………」

エリーが右手を懐に引っ込めている。たぶんPLDをつかんでいるんだろ。怖いよ、マジで。断ればバトル勃発だ。向こうの表情からも、戦闘準備OK、いつでもいけます！とかいう事が伺える。

俺の背筋に冷たい寒気が走った。どうする？俺。断るか？断らざるか？

「エリー、もしかして俺が断ったら、力づくでも奢らす気か？」

「……………」

アイコンタクトで分かった。奢らす気だ。落胆のほか何がある？殺されるのがオチだ。

「……………」

「……………」

何だよ、この沈黙……。嫌な空気だ。俺はボリボリと後頭部を掻いて、その後溜め息を吐いた。

「分あったよ。奢ってやるよ」

「へ？」

エリーの目が輝いた。

「……………」

目かもはや星マークに満たされている。ここまでさせてしまったら、もう奢るといふルートしかない。

帰ったら、今後の金の使い道でも計算しとこ……。

「おいおい、荒れてるぞ?」

「そうだね・・・」

俺もエリーも目が点だ。あろう事か、カウンターの方では店長と店員と思わしきアルバイトの女の子が揉めていた。と言うより、一方的に店長が怒鳴りつけて、アルバイトの方の女の子が何とか言い返しているように見えた。

首を突っ込んだほうがいいのか?これは。横ではエリーがそのトラブル現場に目をむけ、その後俺に目を向け首をかしげた。

「・・・・・・・・」

どうしようか。このままあのトラブルが解決しなかったら一生ここで過ごす羽目になってしまう。

俺は後頭部を掻きながら呆れたような表情を浮かべた。しょうがない。ちよつと首突っ込むか。

俺はエリーを背にその現場に首を突っ込みに行った。

「どうしたんですか?そんな事していると客さんつつかえますよ」

俺のその言葉に店長らしき中年ぐらいの人が俺のほうへ振り向いて、俺を怪訝そうな目で睨んだ。俺はふうつと言う細い息を吐きながら、俺もその店長に向かって、全てを見透かしたような目線を送った。事件現場でも見るような目で・・・。

店長さんはそれに臆したのかじりじりと後ずさった。

奥にいる肩の辺りまで切られたウェーブヘアのかわいらしい女の子は伏目がちな表情で俺の顔を見てきた。俺の背後ではエリーの恐怖の威圧が俺の背中直で当たっていた。俺は何とかポーカーフェイスを貫ききって、咳払いを一つした。

「で、何があったんですか?詳しく詳細さえいただければ・・・」

「そもそも君はいつたいなんだね?この泥棒の」

「泥棒なんかしてません!信じてください!」

なるほどな。俺が推測するに、この店にあるパンが一部なくなってるみたいだな。それで、この女の子が黙って持っていたと思い込

んでしまっているらしい。」

「俺はこの子の友達ですが何か？」

「へ？」

女の子はまさかの顔で俺の顔を見てきた。そりゃびっくりするわな。初対面だもん。後ろからは相変わらずトンでもない威圧が俺の背中にぶち当たっていた。怖いよう、エリーさん。

「で、事情は大雑把には分かりました。で、なぜこの子が犯行をしたと思ってるんですか？」

「簡単さ。この月日君が当番する日の夜だけ、あのショーケースにあるパンの半分がなくなるんだ」

と、店長さんは展示されているショーケースとは反対側のショーケースのパン群を指した。クロワッサンとか、フランスパンとかが並べられている。

「……」

俺は考え込み、この店内にいる人たちに聞きたいことを整理した。こういうタイプでまず聞くことは……。簡単なトリックならば良いんだけどなあ。

「あのおう、いつも何か変わったようなお客さんとかいますか？  
バツサリだなあ、俺。」

「うん？ああいるよ？いつもトイレに入るんだけどね？その人たち」

「トイレ……ですか？」

「ああ、一人目はいつも朝にこの店に訪ねてくる太っている体質の大学生の人と、遠慮がちなサラリーマン、それとすっかり常連になっっているおばあちゃんだよ」

「いつも入るんですか？偶然ではなく？」

「まあ、多分偶然だろうけど。来るたびに入るんだからねえ」

「その人たちは何を買っているか覚えていますか？」

「うん？バラバラだと思うけど……」

と店長さんが顎に手を当てて考えるようなしぐさを見せると、後

るから月日さんが前に出てきた。

「わ、私覚えてます！太りがちな体質の人は、二階に並べられているピザパンとか、イタリアン風のパンを買いだめして持ち帰っていて、遠慮がちなサラリーマンの人は、いつも何も買わずにどこかへ行ってしまつて、おばあちゃんには三階にあるヘルシー食材を利用したパンを買っていくんです」

「じゃあ・・・」

「じゃあ、月日さんが当番をする日に何か変わったことと言つ者はありますか？」

俺の横から突然声がした。しかも、俺が聞きたいことをその口は言つた。

「げっ!？」

つて言うより父さんだ。なんでだ!？」

「父さん！何しに来たんだよ！」

「何つて？一真がこのベーカリーのことを教えてくれたんだろ？日本に帰つたら真つ先に行こうと思つてたんだ。そしてたまたま何やらのトラブルが起きていて、たまたまお前とえりーちゃんがそのトラブルに首を突っ込んでいて、たまたま俺も首を突っ込んだんだ」

「気づいてるか？父さんの言葉の中に‘たまたま’が多いつてことを。つけてたなあ!？」

「はっはっは！まさしくその通り。なにしろ俺じゃあ道が分からなかつたからな。お前たちをこっそりこつつけていたんだ」

「・・・」

気づかなかつた。本当に全く。さすがと言いたところだが、これじゃあこの父親にいつ背後を狙われるか分かつたもんじゃない。

「で、質問にお答えください」

父さんは余裕を持った表情でたずねた。やんわりしてるなあ・・・。

「さ、さあ、知りませんけど・・・」

と店長さんはたじろぎながら答えた。そんな所に後ろからまた別

の店員さんが答えた。

「そういえば、月日ちゃんが当番をする日だけ、いつもトイレの物が片付いてるんですよ」

「片付いてるとは？」

「はい、いつも小麦粉や、ライ麦を店内に入れ込む時、厨房につながるのが、あのトイレ近くの廊下なんです。でも、そこが散らかってると配達の人たちが通れないからって言って、レイちゃんもいつも最後に残って片付けてくれるんです。ちょうど、配達の人たちが通るルートをね」

「それに差支えなんかありませんよね？」

「ありません。間違いないと思います」

「なるほど・・・」

父さんは顎に手を当て、目を閉じて考え込んだ。ちなみに、俺はまだこの事件の推理を七割程度しか分かっていない。まさか、分かったなんてことないよな？

父さんは「うん」と頷き、思考の世界から出てきた。まさかな・・・。

「ありがとうございます。聞きたいことは以上です。ちょっとおトイレをかって頂きませんか？それで、私の推理も確認付けられればいいんですが」

「どうぞご勝手に」

店長さんの言葉に父さんは目を閉じて小さく頭を下げ、ズボンのポケットに手をつ込みながらトイレに続く廊下に入っていった。

なるほど、トイレは男女共用で、洋式の便所が一つしかなく、そして、その廊下の途中に厨房への入り口らしき両開きのドアがあった。そして、廊下の端には急いで掻き分けた感じが見えるダンボール群がある。父さんはしばらくその中を眺め、こっちに振り向いてきた。

「あのう、すみません。もう一つお尋ねしたんですが、ここにあるトイレってペーパーって、いつ取り替えるんですか？」

それには店長が答えた。

「ほぼ毎日です。朝から夜にかけて、急にお客さんが増えるんです。それに伴って、やっぱりトイレを利用する人も増えて、トイレットパーパーを取り替えるなんてことはほぼ、開店している日には日課になっていて・・・」

「そうですか。ありがとうございます。これで、私の推測も正しいと実証されたわけだ」

ん？もう分かったのか？俺でもまだ八割ぐらいだぞ？大丈夫か？俺がそう思った矢先だった。父さんは突然、便座の上に立ち上がり、トイレの天井にあるタイルを抜いた。そして、何か見つけたようだ。

「やはりあなたが犯人でしたか」

父さんの声はそういつていた。

その後、俺の力も借りて、犯人の人を引きずり出した。

その人は、月日さんが言っていた遠慮がちのサラリーマンの人らしい。なんでも、会社が倒産し、寮を追い出され、途方にくれていたところにこのパン屋があった。ここからは説明をするのが億劫だし、端折りながら説明して行こう（雑いなあ、俺）。

つまりだ、今人は金が入らなくて、食料に困っていたところに、このパン屋のトイレに考え込んでいたところ、突然閉店時間になり、このトイレから出てきた後に、このパン屋においてある、パンの大量を発見し、それについていっ手を出してしまったらしい。そしてそれが止まらなくなり、拳銃の果てには現在に至るということだ。

しばらくしてから、宇佐美警部が到着。その人を連れて行き、監視庁でじっくり事情聴取するそうだ。その人には、世界一堅いフランスパンが待ち構えているだろう。

ま、警部に任せておけば、何とかなるだろうが・・・問題は山積んでいる。

「父さん」

「何だ？」

「何で、あの時に犯人のめぼしがついたんだよ。俺でも、まだ八割程度しかできてなかったぞ？」

俺は横で大量買いしたパンをうれしそうに頬張るエリーを傍らに、率直なことを聞いた。

父さんは鼻で笑い、勝者の表情を浮かべた。ムツカつくなあ、相変わらず。

「なあに、簡単なことさ。あの人たちが何で、あんな印象が薄くなりそうなことを言ったと思う？遠慮がちなサラリーマンだということ。」

「？何でだ？」

分からない。何が分かったんだ？あれで。

「お前もまだまだだな。探偵稼業も続けられなくなるぞ？」

「・・・・・・・・」

むかつく……。マジでむかつく。毒一杯なんだよ。あんたの台詞一言に。

「サラリーマンが遠慮がちななんて事よくあるものさ。でも、あの人はそれを一つの特徴として捉え、お前に伝えた。何でだか分かるか？」

「さあ？」

「それは、あの人がその店員さんたちに何か深く印象付ける事をしているからだ。何か奢ってあげるにも、知っている人がいないと意味が無いし、それも印象付けるなら、同じ人にいつも奢ってあげるのが妥当だろう。では、あの人が取り続けた行動とは何か？それは、列の順番譲って上げることだ。それを毎回何度も、何度もな。そんなことをしていれば、いつか店員達の目に止まるだろう。だから、遠慮がちなサラリーマンと言う、‘遠慮がち’と言う特徴が、あの人たちの口から出てきたんだ。それで、ぴんときたんだよ。ここから先はお前に分かるかなあ？」

「・・・・・・・・」

勿論分かっている。もう分かったよ。このむかつく親父のおかげでな！

そうだ、まだ聞きたいことがあるんだった。

「何で父さんはいきなりこの日本に帰ってきたんだ？」

「ん？何でそれを？」

「だって、父さんが書いてる小説の『キラーフ』<sup>セラフ</sup>って、イギリスのロンドンが主な舞台だろう？だから、イギリスに渡る！とかいつてでって行ったわけだ。けど何でいきなり日本に？この前みたいに俺達を呼び出せばよかつただろう？まあ、あのベーカリーに行きたかつたのも分かるけどよお・・・」

「それは、後で教えてやるよ」

父さんはそれだけを言い残し、後は口を開かなくなった。

話し飛ばして、翌朝だ。

「じゃあ、一ちゃん、元気にしててね」

「あいあい、分かったから、さっさと行って頂戴」

飛びすぎか？そう、父さんが帰ってきた理由、それは母さんと一緒にロンドンで暮らしたくて、連れて行こうとしてきたかららしい。そりゃあ、母さんに抵抗あった。いきなり言い出されるものだから、見たことも無いような驚愕一杯の表情を浮かべていたのを鮮明に覚えている。けど、そこはさすがの父さん、上手い事を言っつて、連れて行くことになった。

一真はもう高校生なんだ。一人で何でもできる年代だよ。それに、いいパートナーもいてくれるみたいだしね。

とかなんとか？まあ、別に料理できないわけじゃないし、いつも早起きだから、勝手に弁当を作っている。思い返してみれば、俺ができることは勝手に俺がやっているのだ。じゃあ、別に母さんが父さんと一緒に暮らすために、ロンドンへ行っても大丈夫だろうなあ。

「しつかり毎日お風呂に入るのよ?」

「俺が入ってないと思うか?」

「毎日三食、食べるのよ?」

「守ってるんだけどなあ」

「それと・・・」

「ん?」

母さんが俺の目を見つめてきた。

「えりーちゃんの事、しつかり守ってあげるのよ?あの子でも、

女の子なんだから・・・」

「・・・」

どっちだろうなあ、そのことに関しては・・・。

「じゃあね、一ちゃん。えりーちゃんと仲良くね」

「あ、ああ・・・」

俺、苦笑い。楽しい日はいつぞやの事かとなるとという事が予測でき  
きる。

「行こう、真由子」

「そうね」

母さんと父さんは待たせてあるタクシーに乗り込み、そのまま空  
港に向かって行っていった。

俺はふうつと細い息を吐き、空を眺めた。どんよりとした、黒い  
空を・・・。

車内に、タバコの煙が漂った。どっちも黒づくめの服を着ていて、  
片方は真っ黒なトレンチコートの下に、ハイネックの服を着込み、  
もう一方の男は小太りの男で、サングラスをかけていて、表情がつか  
めない。サングラスをかけているほうの男は携帯の通話を切り、  
運転する白いロングヘアのの男の方に振り向いた。

「アニキ、仁舞にあるマジカルランドが交渉の場になりましたぜ」  
「フン、そうか・・・。あの根性無しの男にはお似合いの場所だ」

なあ。いつまでも甘ったれるから、人があふれる場所を指定しやがる。ま、時間指定が無いんなら、いいか」

その男が運転する車はエンジン音を出しながら、住宅街を走っていく。そして、この黒いどんよりとした空を眺めている、少年の横を通り過ぎた。

(ん？あれは・・・)

俺は道端に出て、さっき通り過ぎた車を目で追いかけた。

(黒のフェラーリFFか……。珍しいな、こんなところを通るなんて)

俺はぼおつとそれを目で見ていると、ポツツと俺の鼻先に水のしずくが落ちてきた。

(雨か・・・)

俺はこのままじゃじゃ降りになる前に家の中に入って行った。

STAGE 12 (後書き)

感想をお願いします！

STAGE OF NEXT

「ね？だから一真、約束だよ？」

「ああ、分かったよ。お前だけが個人で、全国レベルの奴に勝つたら、マジカルランドに連れて行くことだろ？面倒くさいなあ」

俺は嫌味をわざと言うように、顔をしかめた。友里はそんな俺の表情を見て、得意そうな表情を浮かべて、胸を張った。

「あんな約束するから悪いのよッ！」

「……………」

「こいつ…………。まあ、確かに俺が悪いのかもしれないけど…………。」

「連れて行ってくれるよねえ？一真？」

「……………」

怖いよう…………友里さん。口が悪魔の笑いだよ、もはや。俺は何とかポーカーフェイスを貫こうと、苦虫を潰したような表情を浮かべて、友里の顔を見上げた。

「んで、いつ何時どこで約束だ？」

「今日の夕方で、現地集合」

「わかったよ」

これで終わり。簡単だよなあ…………。俺はむしろすっきりする気分になった。

しかし、この日を境に俺はこいつとは違う世界に住むことになるなんて、思ってもいなかった。

STAGE OF NEXT (後書き)

感想をお願いします！

## 後書き

？から読んでいただいている方、お久しぶり！これが初めてな人、初めまして！ariginnndaです。ようやく？終わりました。書いている僕本人が「いつ終わるんだろう」とか鬱を感じていたので、本当に書き終わるのかどうか心配でした。けど、アクセスを見てみたらかなりの人が見に来ていたので、やっぱり完成させなくちゃなと頑張りました。つまり言えば、僕にとっての第一関門クリアです！

さて、この？はエリーが一真の前に姿を現してからの日常を描いた短編集と言うことですが、ここで三つの話について話してみたいと思います！（しっかり書けるかなあ・・・）

### 天の意思。

言われずとも、これは一真の身に降りかかった突然の喜ぶべき不幸と言う話でした。いきなり女の子に「お前の家に居候」するなんていわれて、和馬も相当焦ったでしょうねえ。書いている僕も相当ドキドキしながら書いていました。もしかしたら勝手にキャラが暴走するかもとも思っていました。しかし、蓋を開けてみれば案外自分にしてはうまく書けたものだと思います。重要なのは読者の皆さんの評価ですが・・・。今回の話で、R15のことに挑戦してみましたがどうでしょうか？評価に値するんなら凄くうれいんですか・・・。

### 開かずの間と山姥

ついに一真の本業である探偵の仕事です。凄くベタな入り方ですね。最初は開かずの間と言うことは。しかし、僕の想像力なんて所詮こんな物なんです！すいません！しかも簡単すぎるトリックで・・・。次はもう少しひねりを入れてみます！推理小説ファンにも楽し

めるようなトリックを考えていくので、これからもよろしくお願い  
します！できたらこれからも一真と一緒に考えてやってください！

#### ちらつく影

ついに気になる一真の父親登場！モデルは勿論あの男です！原作  
者に文句言われないかが心配です。でも、子供の推理力があんなに  
あるのに父親の推理力はそれ以下なんて事はあつて欲しくない者で  
やっぱりこのキャラ設定が一番だと思ひましてこれに至りました。  
実際一真より先に事件の真実にたどり着いたのは父親の方ですから  
ね。そして、ついでに本編に続く伏線も……。「モデル分かつた  
！」と思つている方もいると思います。多分思つている通りのキャ  
ラがモデルです。途中途中でも、かぶるような点もありますし……。  
でも、絶対にストーリーりまでパクツたと思われなように考えて  
ますので、「こいつ著作権侵害だあ！」なんて言わずに最後までお  
付き合いしてください。

後書きにしては結構書いたなあ……。

さてさて、「アリアドネの銀弾」ももうここで「序章」プロローグは終わり  
です！ついに本編、次から「発端」オリジンからスタートです。

その本編も魂を燃やして書きますので、これからもよろしく願  
いします！

次巻、一真最大の危機！生き残れ！一真！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8642x/>

---

アリアドネの銀弾?【方程式】

2011年11月19日12時51分発行